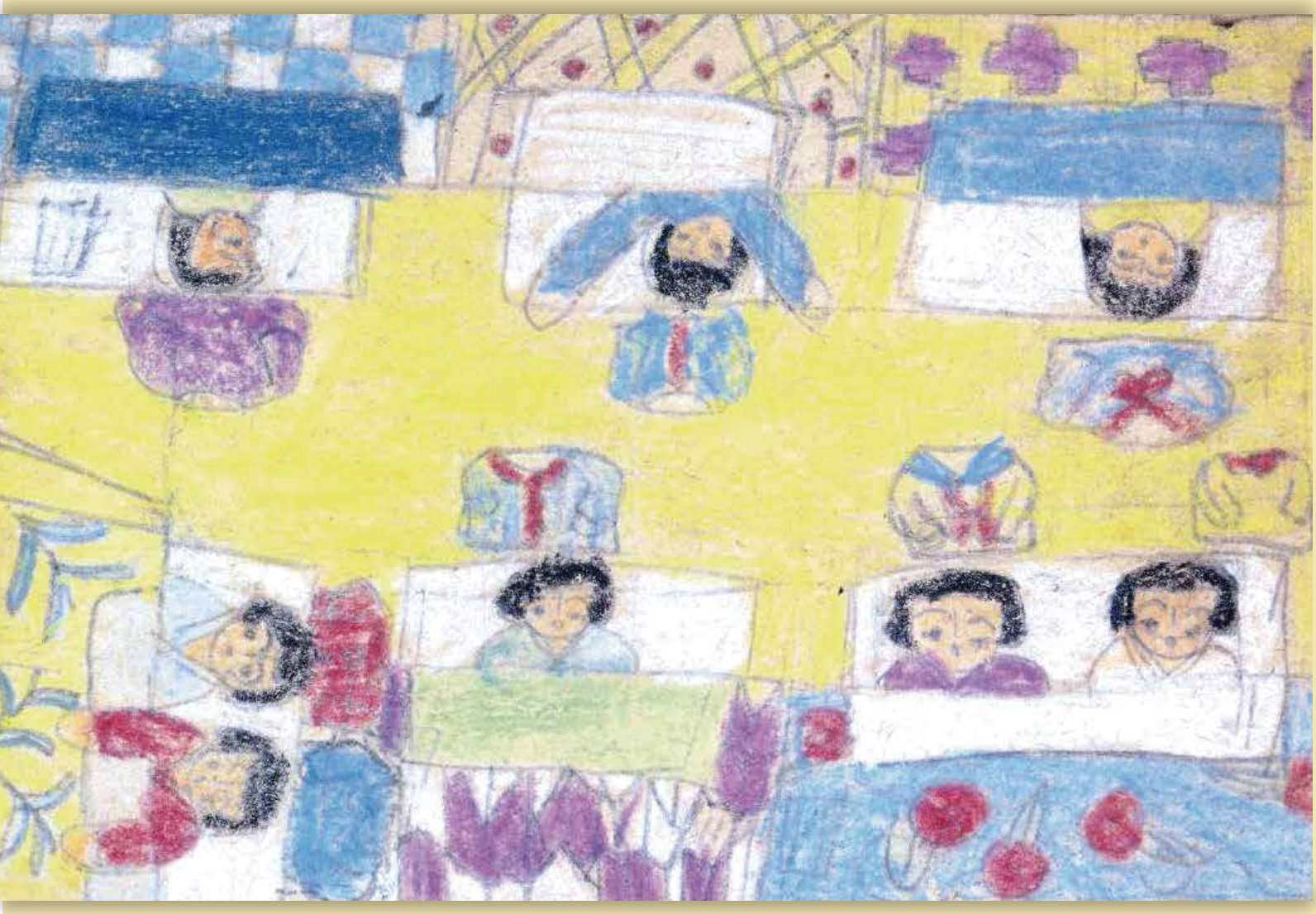
北区戦後70年誌

記憶が紡ぐ平和への願い



City of Kita

平和への願い―発刊にあたって

北区長　花川與惣太

戦後七十年を迎え、北区では平和祈念事業の一環として『戦後七十年誌』を発行することといたしました。

区民の皆様の中には、さきの戦争において、大変苦しく、つらい思い出をお持ちの方々もいらっしゃると思います。しかし、戦争が終わって七十年が過ぎた今日では、戦争体験のない世代も多く、悲惨な思い出が徐々に風化し薄らいでいく傾向にあります。

そこで、二度と過ちを繰り返さないこと、戦争の悲惨さや、平和の尊さについて、後世に語り継いでいくことを目的とし、区民の皆さまの貴重な戦争体験や当時の様子が分かる資料を一冊にまとめました。

戦後、北区は区民の皆様のご努力とご協力のおかげで、発展・成長を遂げておりますが、これからも、北区の将来像である「ともにつくり未来につなぐ　ときめきのまち―人と水とみどりの美しいふるさと北区」を、未来を担う子どもたちに引き継ぐことが、私たちに課せられた大きな責務であります。

今年は、世界の恒久平和と永遠の繁栄を願い、昭和六十一年に北区が「平和都市宣言」を行ってから三十年の節目の年でもあります。

区民の皆様には、この機会に、あらためて平和について考え、願い、語り合い、広く永く語り継いでいただければ幸いと存じます。

終わりに、貴重な戦争体験をお寄せいただいた皆様、写真・資料の提供にご協力をいただきました皆様に心から感謝申し上げまして、発刊のご挨拶といたします。

平成二十八年三月

平和都市宣言

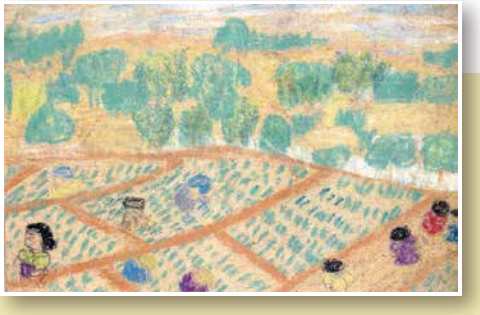
真の平和と安全を実現することは、私たちの願いであるとともに、人類共通の悲願であります。

私たちは、日本国憲法に掲げられた恒久平和の理念に基づき、平和で自由な共同社会の実現に向けて努力しています。

人間のぬくもりを感じるふるさと、美しい自然をこれから生れ育つこども達に伝えることは、私たちに課せられた大きな責務であります。

私たちは、わが国が非核三原則を堅持することを求めるとともに、心から世界の恒久平和と永遠の繁栄を願いつつ、ここに北区が平和都市であることを宣言します。

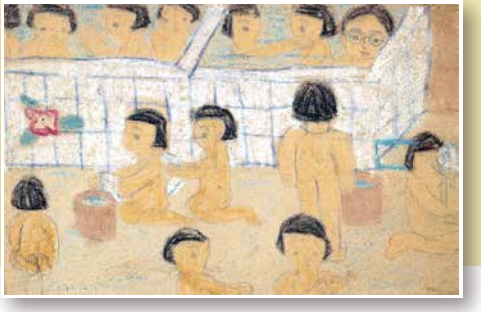
昭和六十一年三月十五日　東京都北区



疎開先から先生への絵手紙

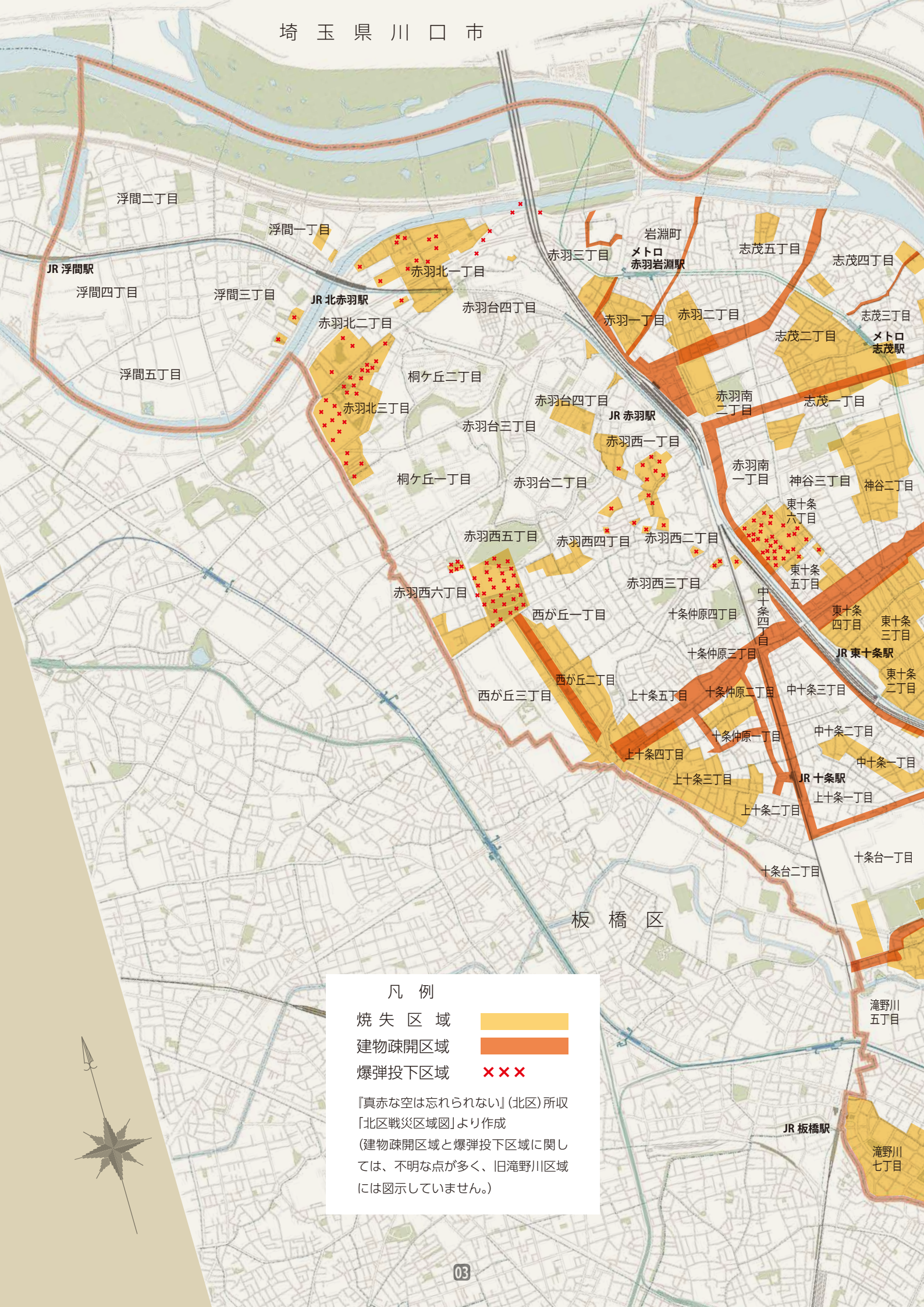
群馬県富岡の竜光寺に疎開した神谷国民学校の児童が、小野由直先生にあてた絵手紙です。本書の表紙に使用したものも含め、全部で十四枚あります。小野先生は病気のため、児童たちを残して東京へ戻りました。病床の先生を思い、児童たちが書いた絵手紙です。

就寝、入浴、田植えの様子や、近隣の農家の女性についても描かれています。



北区の戦災焼失区域

足立区
荒川区
豊島区
文京区
神谷一丁目
豊島八丁目
豊島七丁目
豊島六丁目
豊島五丁目
メトロ
王子神谷駅
豊島四丁目
王子五丁目
王子六丁目
豊島三丁目
王子四丁目
東十条一丁目
王子三丁目
豊島二丁目
豊島一丁目
王子二丁目
岸町二丁目
岸町一丁目
堀船四丁目
堀船三丁目
堀船二丁目
王子一丁目
JR 王子駅
王子本町二丁目
堀船一丁目
王子本町一丁目
王子本町三丁目
栄町
上中里三丁目
昭和町三丁目
昭和町二丁目
昭和町一丁目
JR 尾久駅
上中里二丁目
滝野川四丁目
滝野川二丁目
西ケ原二丁目
JR 上中里駅
田端新町三丁目
メトロ
西ケ原駅
上中里一丁目
東田端二丁目
田端新町二丁目
滝野川三丁目
滝野川一丁目
西ケ原三丁目
田端新町一丁目
西ケ原一丁目
中里一丁目
田端六丁目
東田端一丁目
西ケ原四丁目
中里二丁目
田端五丁目
JR 田端駅
滝野川六丁目
田端四丁目
メトロ
西巣鴨駅
中里三丁目
田端三丁目
田端二丁目
田端一丁目
JR 駒込駅


埼玉県川口市
浮間二丁目
浮間一丁目
JR 浮間駅
浮間四丁目
浮間三丁目
JR 北赤羽駅
赤羽北一丁目
赤羽北二丁目
赤羽台四丁目
浮間五丁目
桐ケ丘二丁目
赤羽北三丁目
赤羽台三丁目
桐ケ丘一丁目
赤羽台二丁目
赤羽三丁目
岩淵町
メトロ
赤羽岩淵駅
志茂五丁目
志茂四丁目
赤羽一丁目
赤羽二丁目
志茂三丁目
志茂二丁目
メトロ
志茂駅
赤羽台四丁目
JR 赤羽駅
赤羽南
二丁目
志茂一丁目
赤羽西一丁目
赤羽南
一丁目
神谷三丁目
神谷二丁目
東十条
六丁目
赤羽西五丁目
赤羽西四丁目
赤羽西二丁目
東十条
五丁目
赤羽西三丁目
赤羽西六丁目
西が丘一丁目
十条仲原四丁目
中十条四丁目
東十条
四丁目
東十条
三丁目
JR 東十条駅
十条仲原三丁目
東十条
二丁目
西が丘二丁目
西が丘三丁目
上十条五丁目
十条仲原二丁目
中十条三丁目
十条仲原一丁目
中十条二丁目
上十条四丁目
中十条一丁目
上十条三丁目
JR 十条駅
上十条一丁目
上十条二丁目
十条台一丁目
十条台二丁目
板橋区
滝野川
五丁目
JR 板橋駅
滝野川
七丁目
凡例
焼失区域
建物疎開区域
爆弾投下区域
『真赤な空は忘れられない』(北区)所収
「北区戦災区域図」より作成
(建物疎開区域と爆弾投下区域に関しては、不明な点が多く、旧滝野川区域には図示していません。)

十条にあった兵器工場

現在の自衛隊十条駐屯地や、中央公園、中央図書館などの位置には、かつて、東京第一陸軍造兵廠という巨大な兵器工場がありました。この工場は、日本の兵器製造の中枢機関でした。

陸軍造兵廠火工廠十条兵器製造所検査掛の集合写真
昭和３年　（小迫一郎氏提供）

陸軍造兵廠の前身、陸軍砲兵工廠に導入されたボイラーや銅製耐震煙突の一部。中央公園文化センター横に屋外展示されている。

東京第一陸軍造兵廠第二製造所庶務掛・工務掛の集合写真
（堀博子氏提供）

陸軍造兵廠火工廠板橋火薬製造所で製造されていた民需向け火薬「マーズ猟用無煙火薬」。板橋火薬製造所は、北区から板橋区にかけての一帯にあった。跡地には東京家政大学などがある。
（梶原利夫氏提供）

造兵廠で使われていた金属製の箱。
「九六式五瓦爆管　五十箇」と書かれている。
（富田幸雄氏提供）

明らかになった中央公園文化センターの色

アメリカ軍に白く塗られていく
中央公園文化センター
昭和20年代（北区立中央図書館提供）

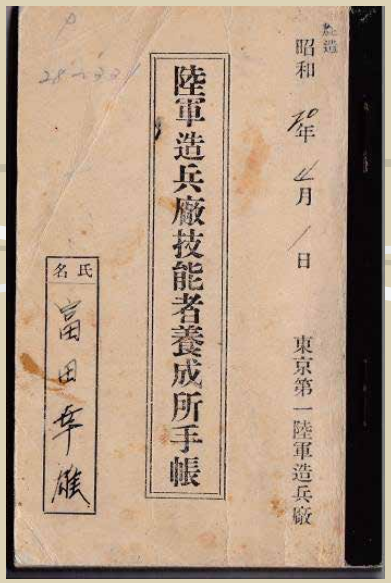
改修工事をしてゆく中で、薄茶色のスクラッチタイルが露出している部分が見つかった。（飛鳥山博物館提供）

耐震性を確認するため、壁の一部がくり抜かれた。すると、白い塗料層の下から、薄茶色のタイルの層が現れた。

現在の中央公園文化センターは、陸軍造兵廠火工廠の本部事務所として、昭和五年に竣工しました。外壁の表面には、スクラッチタイルが貼られています。しかし、終戦後、連合国軍に接収され、表面を白く塗られました。ここを写した戦前の写真には、白黒のものしかなく、戦前どんな色だったのかは謎でした。平成25年から26年にかけて行われた改修工事においては、様々な調査がなされ、もとの色が明らかとなりました。タイルの色は、薄茶色だったのです。

陸軍造兵廠技能者養成所の青春

陸軍造兵廠技能者養成所　大山生徒舎（進藤忠男氏提供）



昭和　年　月　日

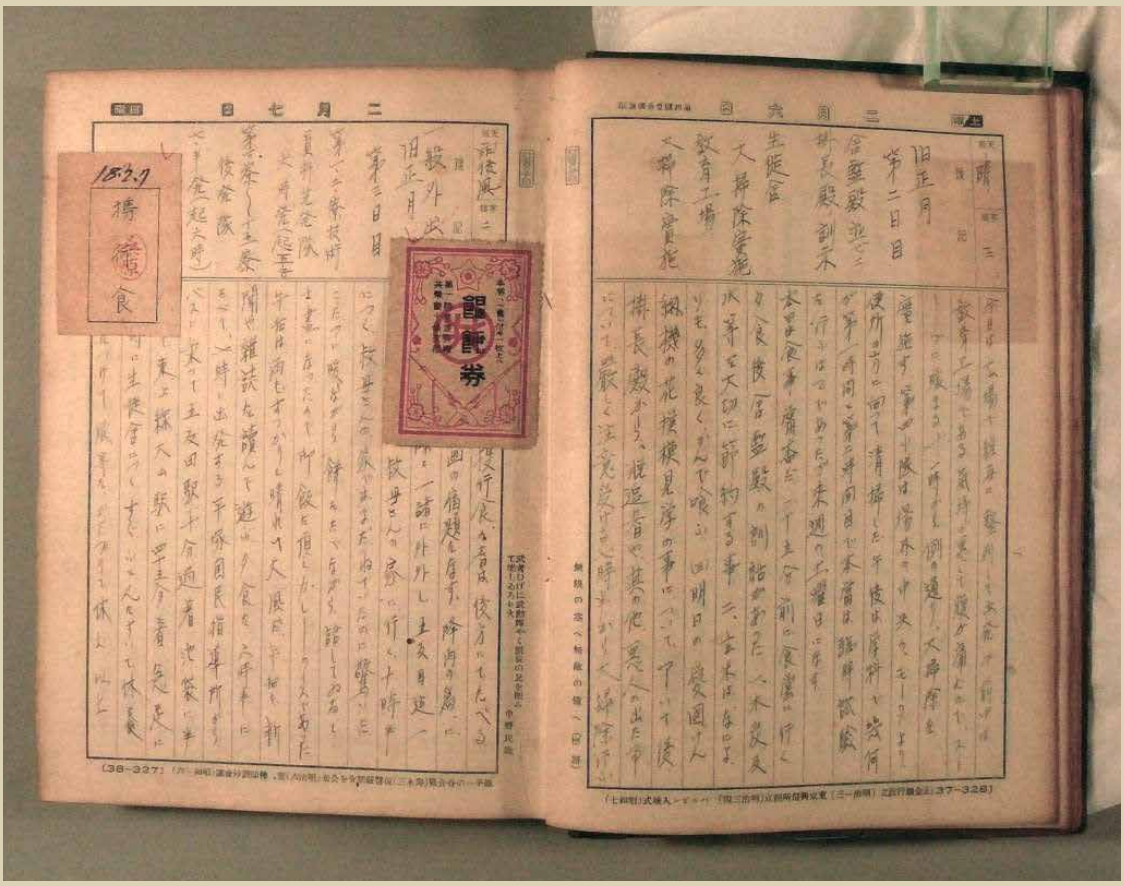
陸軍造兵廠技能者養成所手帳

東京第一陸軍造兵廠

氏名　富田幸雄

陸軍造兵廠技能者養成所手帳
（富田幸雄氏提供）

陸軍造兵廠技能者養成所
大山生徒舎の入浴（進藤忠男氏提供）



陸軍造兵廠技能者養成所の生徒（高買榮氏）の日記。うどん券などがはさまれている。
（高買陽一氏提供）

陸軍造兵廠技能者養成所　大山生徒舎集合写真（進藤忠男氏提供）

十条・滝野川の東京第一陸軍造兵廠には、技能者養成所という学校がありました。学費は無料で、技術が身に付くため人気があったと言います。その寮生活は、軍隊に等しい厳しいものでした。なお、昭和18年の記録を確認すると、戦時下であっても、英語の授業がおこなわれていることに驚きます。英語を「敵性語」として排除する風潮にあっても、やはり、科学技術の場で、英語は必要だったのでしょう。

陸軍造兵廠技能者養成所　大山生徒舎寮長室
（進藤忠男氏提供）

戦争体験文

戦後七十年に寄せて

先の戦争中の私　倉持　慶一　09
城北空襲の記録　穂積　わか　10
勤労動員（私の女学校生活）　戸塚　綾子　13
わが街中里の今昔　池田　公三　14
空襲・爆撃の体験　豊田　穎彦　17
一トン爆弾に直撃される　大澤　栄美　18
戦争の恐怖　橋本　千代子　20
子供の遊び　松村　正　21
悪夢の東京大空襲　岡本　忠直　22
空襲体験　匿　名　24
戦後の体験　村上　房由　25
私の戦争体験　土田　一郎　26
東京大空襲の思い　尾科　芳枝　27
東京での空襲　江川　平三　28
東京大空襲と終戦と父　鈴木　昭司　29
三月十日の大空襲　冨樫　安江　30
横浜大空襲の思い出　野村　英男　32
少年5才、戦争の記憶　横尾　城治　34
戦争体験七十年　桐生　一正　35

戦争体験文

艦載機による機銃掃射の恐怖　高橋　君子　36
勤労動員　山下　茂　38
一生、忘れられない夜　酒井　稔　39
パパの手紙　中村　康子　40
死んでもいゝから寝たいと思った　岡本　幸子　41
戦争が変えた私の人生　畑中　治子　42
戦後七十年を振り返って～学童疎開のことなど～　髙橋　てつ　43
生ると憂（ゆう）ことの幸せ　大久保　治雄　44
九歳の敗戦体験　富樫　健一　45
地球上で戦争を起こさないで！　金澤　寛太郎　46
語り伝える　今村　末子　47
大連の社宅、ソ連兵侵入　本間　静江　48
虱の血　鈴木　三枝子　50
神子島　良男　52

本誌の作成にあたり、北区飛鳥山博物館、北区立中央図書館「北区の部屋」にご提供いただきました写真や資料を活用させていただきました。記して、心より感謝申し上げます。
（敬称は略させていただきました）
個人：榎本和子　梶原利夫　小迫一郎　清水輝政　進藤忠男　高買陽一　田辺弘子
富田幸雄　長谷川二郎　藤代喜代子　古橋研一　堀　博子　渡辺　昭
機関・団体：観音寺　興楽寺

＊本誌に掲載した文の中には、編集上の都合などにより、表現を改めたものが含まれています。また、外交上の配慮や人権擁護などの観点から、現在、一般に使用されない表現が見られますが、当時の実態を示す歴史的な用語としてそのまま使用しています。
＊写真の一部については、プライバシー保護のため、住所氏名などを消しているものがあります。また、著作権等が消滅していると見なされる図書から転載した写真があります。

先の戦争中の私

倉持　慶一（北区王子在住）

日中戦争（当時は支那事変と言っていた）は昭和十二年（一九三七）の七月に開戦されたが、私はその年の春、王子第一小学校に一年生として入学した。入学式の三ヶ月後に全校生徒（児童）が校庭に集められ、校長先生から「大事なお話し」として「今日から日本は支那と戦争を始めた」と話された。小学一年だった私には何も判らなかった。小学四年の十二月に日本は米国英国と開戦、大東亜戦争と言う名の戦争になった。終戦のラジオを聴いたのは中等学校三年の八月だった。私の少年期から青年期に移るまでは戦時下だった。

小学生の間は、近所で出征兵士を見送ったり、オバサン達の防空演習を見物したり、学校から王子神社まで毎月八日に戦勝祈願に歩いて集団参拝したりするくらいだったが、中学に入ってからは、授業に教練という科目があり配属将校という軍服を着た先生にしごかれた。二年からは学校へは行かず、十条の日本化工という工場で勤労動員として毒ガスマスクの部品を作らされた。自転車で工場へ行き帰りに空襲警報のサイレンが鳴ると、道筋のオバサンに「ウチの防空壕に入りなさい」と強制された。昭和二十年になると東京への敵の空襲はほぼ毎夜となり、「敵機来襲！」のラジオ放送とサイレンが鳴り燈火管制で暗い夜空が処々、赤く染まった。私の住む王子四丁目は焼け残ったが、隣の三丁目は全焼のようだった。東側に造兵廠という大きな軍の施設があり、高いコンクリート塀に囲まれた工場で、私たちは「火薬庫」と呼んでいたが、中で何が造られていたか知らなかった。我家はそこからすぐ近かったので空爆の標的になると思われたが、戦後その跡地に入ったら煉瓦造りの建物は残っていた。同じ町内で焼けだされた同級生は浅草の三筋町に越して三月十日の大空襲に逢った。訪ねて行ったら一面の焼野原の中で地下壕から苦しそうな顔を出した。三月末、あと四ヶ月余りで終戦になるのを知らず、我が家は茨城県に疎開した。担任の先生にそのことを届けに行ったら「お前、逃げるのか？」と言われた。疎開先の現在の坂東市では毎夜、東京の空襲の赤い空を眺めていた。

城北空襲の記録

穂積　わか（葛飾区在住）

私は大正七年二月二十日東京市小石川区丸山町（現在の文京区千石三丁目）で次女として生まれました。父は体が弱かったそうで、私が生まれた年の九月二十一日に亡くなり、母、美津は近所の家の下働きなどをしながら、私達二人を苦労して育ててくれました。

その後、昭和六年十二月に姉が結婚しました。お相手は滝野川警察に勤めていて警察署のそばに住居を構えたので（北区滝野川一丁目）母と私もその近所に住居を移しました。

姉は手先が器用で近所の人から「これからは洋服の時代になるので洋裁学校に通えば将来きっと役に立つ」と言われ、洋裁学校に通って卒業後、滝野川第三小学校の正門前で九州美（くすみ）洋裁店を始めました。家が広かったので私達もそこに同居して洋裁店の手伝いをするようになりました。まだ洋服が珍しかったためか近所でも評判になり、洋裁の注文もやりきれないほど入り、大晦日の夜遅くまで姉とミシンを踏んだことを良く覚えています。

昭和十六年、私も結婚して豊島区駒込六丁目のアパートに住まいを構えました。その後十七年二月に長女が生まれたころから日本は戦争に向かっていくのを感じていました。長女を生んだ病院の窓から、シンガポール陥落を祝った提灯行列の灯と小旗を眺めていました。

それから半年ほどたった時に主人に召集令状が届きました。出発の日、近所の人から祝福を受けながら主人は出かけていきました。私はまだ小さい長女をおぶったまま見送りました。夕方になって、これからどうやって暮らしていこうか、とぼんやりと考えていたときに革靴の音が響いてきて玄関の前で止まりました。玄関を開けると主人が立っていたのです。主人は足が速く、小学校の時に村代表のリレーの練習中転んで、竹製のバトンがさけて右足の脛に食い込んでしまう大けがを負っていました。兵隊の配属前に検査があって、軍医がその足を見てすぐに不合格にされたそうです。又、主人はそのころ、月島の石川島製作所で駆逐艦の修理などの仕事をしていて機械加工の技術を身につけていたので、国内で兵器の生産に携わるよう言われ、無事家に戻ることが出来たそうです。それでも家に帰ることは

恥ずかしい事だったので、ひっそりと帰ってきたそうです。

そのころから、食料も配給制になってきました。それこそ食べるものも無くなってきて、子供の分で配給されるビスケットで何とか三人で食いつなぐようになってきました。

昭和十九年頃から東京にも空襲が始まってきました。そのころは日中空高くアメリカの飛行機が数機飛んできますが何事も起こりません。やがて十九年の暮れあたりから実際に空襲が起こってきました。

昭和二十年三月十日は駒込のあたりは大丈夫でしたが日暮里、浅草方面は真っ赤な空になっていたのをはっきりと覚えています。

そして四月十三日の夜が始まりました。空襲警報がなり、女性、子供はすぐに避難しましたが男性は出来るだけ最後まで残るように言われていました。私は長女をおぶって布団をかぶり、主人から預かった寅さんが持っているような茶色の大きなバックを持たされて一足早く避難を始めました。大きな道路は荷物を持った人、荷車でごった返して歩けない程でしたが、なんとか西ケ原の古河邸（旧古河庭園）までたどり着きました。その中にはたくさんの人が避難をしていたので私も入ろうと入口まで行ったところ、荷物を持っては入れません。それを置いて入ってくださいと、抱えていた大きなバックを置くように言われました。主人から預かった荷物を置いて入るわけにもいきませんし、それより大勢の人でごった返しているこの中に爆弾が落ちてきたら絶対に助からないと思った私は、春日町まで燃えてきている、というまわりの声を聴きながら、暗くて人のいない方角を目指して歩きだしました。真っ暗な中、必死に逃げていると、消防団の人から声をかけられました。「赤ちゃんを負ぶっているのですか。ここは爆弾が落ちてくるので危ない。こちらに来なさい」と言われ近くの防空壕に連れて行ってくれました。そこには誰も居ませんでした。余り奥に入っては爆弾が落ちてきたときに逃げられないと思い、入口に子供をおぶったまま座って朝を待ちました。幸いにも近所には爆弾が落とされず、朝になって防空壕からでてみると「災害にあった人はこちらに集まってください。」との声とともにたくさんの人がそちらに向かって歩いていました。私も広場まで一緒について行って当てもなくぼう然としていました。すると「そこにいるのは穂積さんですか?」と声をかけられました。アパートの隣に住んでいる千野さんでした。旦那さんは?と聞かれて離れ離れになってしまったと訳を話すと「私が探してきてあげます。この荷物を持っていてください。」と大きいリュックを下ろして駒込の住まいの方に向

かっていきました。ずいぶん待った後、人ごみの中から主人を連れて千野さんが向かってきました。手を取り合って無事を喜びました。

千野さんが駒込駅に向かっていくと凄い人ごみの中、駒込の方から降りてきた主人と霜降橋の上でばったりと出会ったそうです。主人は近所の人全員が避難したことを確認してから逃げたそうですが、もうそのころは空襲にあい、あちこちから火の手が上がっていたので、ここは危ないと駒込駅の付近の崖から省線電車の線路まで滑り降りて線路際にある側溝の中を目立たないようにはって逃げて助かったそうです。

三人で一休みした後、千野さんは勤めていた日立製作所まで行ってくる、と言って別れましたがその後会うことはありませんでした。主人は「部屋の地面を掘ってお米を埋めてあるからそれを取ってくる。」と言ってまたアパートに戻って行きました。ずいぶんと待ったあと、家に戻ったらアパートは全部焼け落ちてしまったそうですが、深く掘って埋めておいたお米は無事で、掘り出して鉄兜で炊いて沢山おにぎりにして持ってきてくれました。

周りの人にも分けてあげて何とか落ち着きました。その日に主人は池袋駅前まで行ったそうですが、道端に焼けた死体が随分横たわっていたそうです。

とにかくこれから何とかしなければと池袋から東上線で少し行った板橋に主人の親戚があるのでその人を頼ってしばらく間借りをさせてもらいました。そこは畑が連なっているところで空襲の心配は無いようです。夜になると灯火管制で家の明かりを消して緊張した中、爆音を響かせてB29の編隊が飛んでいく様子をその家の小学五年生の息子さんが、ラジオのアナウンサーのような口調で実況中継をしてくれるので随分緊張が和らぎました。

そんな時に福島の主人の兄から「帰れるうちにこっちに避難して来なさい」との手紙をもらって東京を後にして、白河の表郷村に避難して、そのまま八年間を過ごしました。

隣組防空群の人々
モンペにゲートルを巻き、手袋に頭巾という完全装備です。
田端の防空訓練（田辺弘子氏提供）

勤労動員（私の女学校生活）

戸塚　綾子（北区志茂在住）

昭和十六年、東京の高等女学校に入学した私は、学業を学ぶ暇も殆ど無いまま、学徒動員という事で、十条の弾丸工場に配備となり、小銃の弾丸を製造する機械を動かしておりました。

私の一家は、母は群馬県の実家へ縁故疎開、小学生だった弟二人、妹二人は、山梨県のお寺へ学童疎開、父と私だけが東京に残ったのです。

家の庭に父と私が入れる防空壕を作り、空襲のある度にその壕に入り息をひそめるというありさま。実際低空飛行で機銃掃射するアメリカ兵の横顔を、防空壕のすき間から見た事もあります。

学徒動員先の弾丸工場では、女子も夜勤がありました。夜勤中に空襲に会い、防空壕にかけ込む事もしばしばでした。

空襲の日、私は夜勤でした。十条は高台ですので、防空壕のすき間から眺めるとB29の機体から投下された焼夷弾が、地上に吸い込まれる様にパラパラと落下、すぐに火の手が上がるのです。一面の火の海を眺め、家にいる父の事が心配でした。

一夜があけて、白金（しろがね）に家のある仲良しの友人と二人で、赤羽のわが家へ向かいました。電車は止まってしまったので、歩いて何とか行けるわが家へ、線路上を歩いて向かいました。

赤羽駅前に着くと、あたり一面焼け野が原、炎は収まっていましたが、煙があちらこちらからまだ立ち上（のぼ）っていました。

焼け野原と化した道無き道をふみわけて、わが家の近くまで来ると、奇跡的にその一角数軒が焼け残っており、父があとかたづけをしていました。

友人は数日わが家で過ごし、電車が動く様になって、自宅へ帰って行きました。

疎開していた母も弟妹達も、終戦後家に戻りました。

二十年九月、私は高等女学校の卒業証書を受け取りました。印刷所が焼けてしまい、九月まで卒業証書が作れなかったとの事でした。

殆ど学問をする事の無かった私の高等女学校生活でした。

わが街中里の今昔

池田　公三（北区中里在住）

余命少ない人生となり、生涯を過ごさせて頂いたわが街中里に、どんな事があったのか、特筆すべき事を書き残す事にしました。

ご笑覧いただければ幸いです。

記

1．戦前のこと

私は、昭和六年に駒込駅東口近くの中里で生まれた。

当時は、道路は舗装されておらず、溝川（どぶがわ）といわれていた谷田川は、大雨が降ると氾濫して、谷田川近辺から駅前にかけた低地が床上浸水となり、小学校の帰りには東京養老院に足留めされて炊き出しのお握りを頂き、親の迎えを待って帰宅したものである。

その谷田川が、昭和十六年頃に十メートル程掘削されて大きな土管を埋設し、今の舗装道路に改装されたので、浸水被害はなくなった。

その時、ガード下付近の底地から大量な三十センチ大の貝の化石が出土し、東京大学の考古学者がやって来て、その化石を持ち帰ったのである。

大昔、中里一帯は海岸だったようである。

2．戦中のこと

そんなわが街も、第二次世界大戦に突入し、戦況が厳しくなって米軍の爆撃機が来襲するようになると、谷田川通りに面した両側の住民たちを強制疎開させて建物の取り壊しが始まり、その作業を旧古河庭園に駐屯していた兵隊たちが行った。

そんな昭和二十年（一九四五）四月十三日夜、わが街中里が米軍爆撃機B29の焼夷弾攻撃を受けたのである。

空襲は、昼間は爆撃機が小さく見える高度からの爆弾攻撃であったが、当夜は、まず照明弾をふわふわと時間をかけて落下させ、真昼のような明るさに一帯を照らし、爆撃機が両手を広げた程の低空に降りて焼夷弾をばら撒いたのである。

その直前のこと、旧古河庭園に駐屯していた大家さんの知り合いの上等兵がやって来て、「危なくなったから避難しなさい」と呼びに来られた。私と姉は大家さんと一緒に兵隊さんの後について霜降橋から旧古河庭園に向かう坂道の途中まで来た時、

爆撃機の攻撃を受けたのである。
兵隊さんが「伏せ」と大声で叫んだ。私は自転車を引っ張りながら伏せて上を見ると、爆撃機の胴体が開き、大型の爆弾が幾つも飛び出し、その大型爆弾が破裂して小型の焼夷弾（長さ四十センチの八角柱）が火を吹いてパラパラと落ちて来たのである。
真上から花火のように大量に落ちて来るのを見て、このままではやられると直感して急いで坂道を駆け上り、旧古河庭園の前に辿り着いた。
しかし、門前には番兵が立っていて、中には入れなかった。
暫くすると、焼夷弾が庭園の裏門に落ち、消火のため番兵がいなくなった時、突然突風が吹いて門が開いたのである。鉄の扉は供出されて木製に変わっていたのである。
思わず自転車ごと逃げ込み、命は助かった。しかし、火の粉をパラパラと浴び、生きた心地がしなかった。
空襲が止むと、燃え煙むる地上に大きな朝日が昇り始めた。
あんな大きな朝日は未だかつて見たことがなかった。
それほどに一帯が広く焼けてしまったのである。
明るくなって、自宅の焼け跡に戻る途中で、焼け死んだ方が紫に変色した肌を露出して焼け焦げた姿で横たわっているのを幾つも見た。
この時、空襲の恐ろしさを身に染みて感じたのである。
自宅の焼け跡に着くと、我が家の防空壕に親爆弾の頭の部分が落ちていた。危うく命を落とすところだった。
そこに姉が独り寂しく立っていたが、私の姿を見ると駆け寄って来て「好かった、好かった、公ちゃん死んだと思った」と言って涙を流して喜んでくれた。
姉は私の後に就いて避難したが、霜降橋で焼夷弾が落ちてきたので、駒込駅に向かい、本郷中学校に逃げ込んだが、あの異様な悪臭の煙りに目をはらし、息が出来ず死ぬ思いをしたと語った。
姉は、これが引き金となって肺病を患い、一年後に十七才の若さで帰らぬ人となった。
また、聖学院のグランドに避難した人は、火焔の強風が何度もなめ回すので、もう駄目だと思ったと話していた。
その後、焼け残った聖学院が罹災者の収容所となった旨の記録が残されている。
姉と私は焼跡で途方に暮れていると、大家さんがやって来て、電車や交通機関が止まっていたので、私の自転車を貸して欲しいと言って乗って行かれたが、数時間して戻って来られ、焼け

なかった親戚の家にと案内してくれた。

この時、私の自転車が唯一の乗り物だったのである。

姉と私は、駒込から巣鴨、大塚、池袋、目白と歩く先々がすべて焼野原となって煙っていたので、当日の空襲の凄まじさ、恐ろしさを改めて思い知らされたのである。

翌日、大家さんに自転車を預け、東武東上線が上板橋駅から運転していたので、焼け跡に残った歪んだ洗面器と塩の固まりを持って電車に乗ろうとしたら、罹災者であることを知って駅員が無料で乗車させてくれた。

こうして姉と私は、やっとの思いで成増の親戚の家に辿り着くことが出来たのである。

伯父が出迎えてくれ、「お前達どうした。心配してたよ」と言うと、姉は「伯父さん家が焼けちゃったの」と言いながら伯父に抱き付いて大声で泣き出した。今まで堪(こら)えていた悲しみを一気に吐き出したのである。私もつれ泣きした。

住む家を焼かれ、着る物、食べ物一切を失い、この時から苦難の生活が始まった。

多くの人の命を奪い、人々の幸せが失われる。これが戦争なのである。

3．戦後のこと

私は、小さな弟妹を連れて疎開していた母の新潟県の知り合いの家にお世話になっていたが、戦争が終わったので中里に帰ろうとしたところ、食糧難のためか転入がストップされた。やむなく川越の知り合いにお世話になり、毎月区役所にお願いに行き、昭和二十三年四月一日にやっと中里に転入が許された。

この時から、念願の生れ育った中里に戻り、貧しい乍らも一家揃って暮らすことが出来たのである。

以来、私の掛(か)け替(が)えのない故郷(ふるさと)は中里であると自覚し、少しでもお役に立てばと、町会や青少年対策委員会などに参加して、子供会や暮れの餅つき会などを行った。

この行事が、今に受け継がれて、『子供天国・歳末餅つき大会』と、子供達や町民に喜ばれていることは、誠に嬉しいことである。

あれから七十年、今は平和、もう戦争はご免だ。

以上

空襲・爆撃の体験

豊田　頴彦（北区赤羽西在住）

終戦直前の穏やかな夏の午前、超低空のB29数機が東からやってくるのが見えた。その直後、激しい爆撃音が轟いた。近くに爆弾が落ち衝撃音と共に、大きな土煙が上がった。その瞬間、庭に避難していた私は、爆風で飛ばされた。

しかし幸い頭を打たず助かった。家をみると雨戸が全部落ちていた。ガラスは一部が破損したのみであった。

夏の暑い空には映画で見るような爆撃による破片が舞っていた。喉が渇き生きているのを実感した。近くの模様を見に行ったところ、小さな公園では二人の遺体が転がっていた。その模様を描くには忍びない。

次いで土煙の上がった西側の被害模様を知るべく、足を神社に向けた。町の鎮守様である神社の鳥居は直撃を受け真二つに割れて落ちていた。コンクリートの鳥居だ。

後で聞いた話であるが、この神社を守っている二人の方が亡くなったと聞いた。いまでも鳥居の一部が残されている。終戦五日前のことである。幸い子ども達は疎開でいなかったことから助かった。

更に別の日、艦載機（P51）が駅にいた僕らを襲ってきた。子どもの僕らを標的に機銃掃射を繰り返してきた。P51の操縦席にはパイロットの顔がはっきり見える。戦争は大人も子どももない。

戦争は人を殺すのは何とも思わない精神状態になるようだ。私はこのような殺戮を繰り返す中でも運よく生き延びられた。ましてや食べ物もろくにない状態なのにだ。

いまでもよく生きていたことを実感している。戦争は二度としてはならない！これらの戦争体験を次世代の子ども達に伝えるのが私の使命と思っている。あと幾ばくも無い生命かもしれないが、これだけはやりとおしたい。

防空訓練
現実の空襲火災はバケツリレーで消せるものではありませんでした。
田端の防空訓練（田辺弘子氏提供）

一トン爆弾に直撃される

大澤　栄美（北区赤羽北在住）

昭和二十年（一九四五）八月十日は、私にとって生涯忘れることができない日であります。日本の戦局も悪化の一途をたどり、それと共に戦時体制は一層強まり、働き盛りの労働者が大量に徴兵されたために、労働力不足が深刻となり、それを補うために、私のような中学三年生（十三歳）の生徒まで軍需工場に動員されました。

私の工場は、防毒マスクの部品を作る小規模な町工場でした。場所は、埼京線北赤羽トンネルの近くにあり、丘陵地帯の崖下には被服廠用の防空壕が何本も掘られていました。

昭和二十年八月十日九時三十分頃、B29約百五十機の空襲がありました。当時、私は工場で空襲警報伝達の役と見張りの役を命じられました。たまたまその時、工場長が工場疎開の件で、群馬の松井田に出張していたので、いつもなら、水槽タンク台に設けられた見張り台に立って、「敵機来襲」「敵機来襲」と叫ばなければならなかったが、さぼってしまいました。爆弾投下の瞬間は、大地を揺るがす大震動とともに、あたり一面真っ暗になり、地獄とはこんなものかと思いました。気が付いてみると、壕の中に、剃刀の刃のように尖った爆弾の破片が散乱していました。爆弾の死角というか、至近距離にいた私が助かって、離れたところにいた仲間が爆死するなんて、生と死は、まったく紙一重だとつくづく思いました。今でもトラウマ（心的外傷）によく悩まされます。遺体を収容しましたが、戸田斎場は開店休業状態だったので、工場内の敷地で荼毘にふすることになりました。十三歳の少年が火葬の手伝いをするなんて夢に思ってもいませんでした。

歴史年表を調べてみると、「御前会議で聖断がくだり、条件付き（天皇制存続）で、ポツダム宣言の受諾を決定し、米国に通告した。」と述べてあります。もっと早く降服していれば何万もの無辜（むこ）の人々が死ぬことはなかったのです。

壊滅した工場の後片付けをした後、帰宅したが、お腹を空かせ、食べ物を探しに荒川土手に行きました。当時極度の食糧不足を補うため違法を承知でささやかな畠を作っていました。ふと鉄橋を見上げると、鉄橋の肩の部分が爆弾により破壊され、バラバラになっていました。爆弾は、護岸のコンクリートを貫通し、

川底で七十年間眠っていたことになります。早期通報者の届け出に従っていれば不発弾処理に六千八百人もの人々の避難の必要はなかったのではないかと思います。

十三歳の少年が一トン爆弾の直撃を受けたり、火葬の手伝いをしたりすることは、絶対にあってはならない。戦争は、絶対におこしてはならない。きな臭い匂いがしたら、大事に至らないうちに、消し止めなければならない。

帰ってきた応召の鐘

戦争中、兵器を造るための金属が不足しました。町内会や隣組による金属回収がおこなわれましたが、それでも足らないため寺院の鐘までが供出されました。これらの鐘の多くは、溶かされて兵器などに造りかえられるはずでしたが、一部の鐘は、終戦後まで、その形をとどめました。それらの中には、地元有志などの努力により、もとの寺院に戻されたものもあります。北区内でも、浮間の観音寺と、田端の與楽寺に、このような鐘が残されています。

右：昭和18年ごろ、金属供出のため、浮間の観音寺から「応召」されていった鐘。（清水輝政氏提供）

下：浮間の観音寺に戻された「應召の鐘」。台座には「昭和五十八年七月二日　佛縁に依り帰る」と刻まれている。戦後、都内の別の寺で発見され、地元の人々の努力により返還されたもの。

田端の與楽寺に保存されている鐘。白いペンキで「免除」「買鑛課」と書かれている。一度は金属供出の対象になったものの、免除となったようである。詳細は不明だが、当時、歴史的美術的価値などの理由で、供出を免除する規定はあった。（古橋研一氏提供）

戦争の恐怖

橋本　千代子（北区赤羽西在住）

今、九十六歳の私が強く思うことは戦争はあってはならぬこと。戦争の初めから終わりまで誰もが異常な経験をし続けるからだ。

昭和十四年、私が結婚して居を構えたのは北区稲付庚塚、今の赤羽西四丁目で、小さな庭のある平屋が並ぶ住宅地であった。翌十五年に長女が、十八年には次女が誕生。楽しいはずの親子四人の生活は太平洋戦争突入の故に何とも悲惨な生活に暗転した。

戦争は人の心を狂わせる。空襲警報に怯えながら、主婦たちは軍事訓練や防火訓練を命じられる。赤ん坊を背負った者も腰の曲がった高齢者も容赦なく、三岩小学校の校庭に集められ「エイエイ、ヤー」と、竹やりで敵を討つ訓練を少尉から受け、ばかばかしいと言える者もいなかった。隣組が意地悪な目を光らせている中で、焼夷弾が落ちて延焼しないように、屋根に登ってバケツリレーで水を撒く防火訓練も命じられた。ふらつく梯子に登って屋根にどんどん水を撒くと、足がすくんでしまった。

赤羽台の工兵隊が何百人も、我が家の前の道路を地響きを立てて、行進演習すると、地震のように家が揺れた。近くで、友軍機が射ち落されて二人の兵士が死んだ。

日に何回か空襲警報が鳴る度に、家の前の坂道の中に掘った小さな防空壕に入り、モグラの親子のように身をかがめて、敵機が過ぎるのを待つ間、長女は「こわくないよ、こわくないからね」と次女の防空頭巾をなでると、不思議と一歳の次女は泣かなかった。

東京大空襲の翌月、赤羽駅一帯が焼け野原と化し、新聞も読める明るさであった。その後、埼玉の鴻巣に疎開をして、八月の終戦を迎えたが、すぐに食料もあるわけでなく、空腹が一番人間を不幸にするし残酷にする。食糧不足は戦後も続き、炎天下、ベーカリーの前には食パンを求める何百人もの列ができた。売り切れと言われて、泣くことも知らない二人の幼女を連れて帰った切なさを、涙が乾くことがなかった戦争の日々を私は忘れない。二度と戦争をしないでほしい。

子供の遊び

松村　正（北区滝野川在住）

私は、北区立滝野川第六小学校を昭和二十九年三月に卒業した。当時滝野川五丁目に住んでおり我々の遊び場は「東京砲兵工廠や火薬製造所の焼跡であった。そこで棒切れや竹棹で戦争ゴッコやチャンバラ、鬼ゴッコをしながら走り廻っていた。隣接の石神井川では猫や犬の死骸そして人間の土左ェ門が時々流れてきた。土左ェ門を女の子達にも見せ、彼女達のビックリする姿を面白がったものだ。

自宅の近くに王子野戦病院（元東京第一陸軍造兵廠本部、現中央公園文化センター）がありその外周にある土手には、春になるとノビルが一杯生える。米軍兵士が銃を片手に定期的に見廻りにくるので大人はノビルを取りにこず、ノビル取りは子供達の特権となっていた。家に持ち帰ると家族は大喜びで夕食の食卓へならぶ。家の廻りでは「水・雷・艦長」（注）という鬼ゴッコとベーゴマが人気の遊びだった。ベーゴマ遊びでは、野戦病院に勤めている人から支給品の古いオーバーを貰い受け、このオーバーの切れはしをベーゴマの「床（とこ）」に使った。「床」は普通の布を使ったのでは直ぐ破れてしまう。米軍のオーバーはベーゴマの回転に適しており、長持ちする為、よその子供達も集ってきた。ベーゴマは真剣勝負の取り合いで、我々はベーゴマの表面にロウをたらし底をケズり重心を下げる事で相手のベーゴマをはじき飛ばした。今の子供達は家の中でゲームに熱中しているが、この子供達に昔の遊びを是非味わわせてみたいものだ。

（注）「水・雷・艦長」
敵、味方二班に分れる。艦長は雷（駆逐艦の魚雷）に勝ち、雷は水兵に勝ち、水兵は艦長に勝つ、三すくみの鬼ゴッコである。艦長は一人、雷と水兵は何人でも良し。それぞれタッチすると捕虜になる。艦長がタッチされたら勝負あり。

薬莢を拾う人々
戦後、連合国軍に接収された旧軍用地には、生活費の足しにと薬莢を拾う人々が現れました。
赤羽の米軍用地で薬莢を拾う家族
（渡辺昭氏提供）

悪夢の東京大空襲

岡本　忠直（北区西ケ原在住）

東京の大空襲は、昭和二十年三月十日の東京大空襲、四月十三日の城北空襲、そしてとどめの五月二十五日の山の手空襲である。当時、私は都立上野中学（現在の都立上野高校）の二年生であり、北区西ケ原で四月十三日及び五月二十五日の二度の大空襲を体験した。

1　四月十三日の城北空襲

三月十日の大空襲では十万人以上の人が犠牲になったという。それから一ヶ月後B29の編隊は東京山の手を襲った。この時の焼夷弾は、三月十日のときと同じく油脂焼夷弾である。母は学童疎開をしている弟や妹の所に面会に行っており、空襲当日は私と父と二人だけであった。周りの空を見渡すと周囲はすでに火の手が上がっており父と私は炎の大きな円に囲まれ逃げる方向を見失っていた。B29の編隊はまず目標の周囲に円に沿って焼夷弾を投下し非戦闘員である我々の退路を断った後、残された暗い円の中に大量の焼夷弾を投下したのである。即ち、皆殺し作戦である。隣近所の人達の姿は見えず、家の屋根に登って水をかけるなど防火活動をしていた我々二人だけが取り残されたのである。最後の焼夷弾がパラパラと落ち、最早これまでと二人は退避を始めたのであるが、二軒先に脊髄カリエスを患い寝たきりの男性が残っていた。父は彼を背負い一緒に近くの農地まで退避して彼の命を救ったのである。なお、退避の途中、両側の家々はすでに紅蓮の炎に包まれており、焼けた木片が防空頭巾の上に落ち、又、輻射熱によって非常に暑く、更に又、強い風が吹き荒れて何度も転びながら退避したのである。退避が少し遅れていたならば、現在の私は存在しなかったものと思われる。

2　五月二十五日の山の手空襲

このときの焼夷弾はエレクトロン焼夷弾と云い、三月、四月に投下された焼夷弾とは全く異なるものであった。即ち、三月、四月の焼夷弾は木造家屋を焼き尽くすための焼夷弾であるが、五月二十五日に投下された焼夷弾は地下防空壕に逃れた市民の殺戮を目的とした焼夷弾であった。この時の焼夷弾は前に投下された焼夷弾に比べて小さく20㎝ほどのアルマイト容器に、着地と同時に高熱を発する化学物質が入れられ、更にその下には

二～三倍の長さの鉄製の重りがついていた。このような焼夷弾が爆弾を中心として周りに並べて積まれ、モロトフのパンかごと呼ばれていた。投下されると同時にパンかごが開き、鉄の重みと上に取り付けられたプロペラによって加速され猛スピードで地上に落下するのである。厚さ5㎝程のコンクリートも貫通出来るほどの破壊力があり、着地と同時に辺りを高熱で焼き尽くす恐ろしい焼夷弾であった。我々は焼け出された後、焼け野原の防空壕で生活をしており、このような焼夷弾が当らないようにと祈っていたのである。

赤羽空襲の跡を走る京浜東北線　昭和21年
（渡辺昭氏提供）

城北空襲と赤羽空襲

北区内で、最大の被害を出した空襲は、東京大空襲の約一か月後、昭和二十年四月十三日深夜から十四日未明にかけての城北空襲でした。焼夷弾が無差別に投下され、現在の北区のほか、足立区・荒川区・文京区・板橋区・豊島区など、東京都区部の北部で家が焼かれ、多くの人命が失われたのです。

さらに、あと五日で終戦という八月十日のお昼前、B29のほかにP51戦闘機も加わって、赤羽周辺で大きな空襲がおこなわれました。この時には、一トン爆弾などが使用されています。

赤羽台さくら並木公園に保存されている
防空壕の跡

空襲体験

匿　名（北区浮間在住）

親戚を頼り、現在の戸田市に縁故疎開をしていた。

戸田橋を落とそうと、多くの敵機に狙われていたことを今でもよく覚えている。

ものすごい低空飛行をしたままの状態で焼夷弾を落としていく、その「ゴー」という音は今でも忘れられない。そして地響きとともに爆発、まぶしい光に辺り一帯は包まれていた。

その地響きと音は、尺玉の花火を打ち上げる時とよく似ている。おかげで今でも花火は見ようと思わない。

焼夷弾が落ちたところは大きく窪む。浮間小学校の前にも大きく窪みがあり雨の日にはいつも水が溜まっていた。区画整理が終わるまでその状態が続いていたと記憶している。

農村地帯だった浮間は、自分たちが食べる分だけの農作物はどうにかとれていた。そうは言ってもギリギリの量である。

小学校の時のこと、お昼休みになると持参した弁当を食べる子がほとんどだが、家に食べに帰る子もいた。今にして思えば、弁当どころか食べるものが無く、食べたふりをして午後になると学校へ戻ってきていたのだろう。それほど常に飢餓状態だった。それでも、現在の添加物だらけの食生活よりは、量は少なくても自然でよっぽどいいものを食べていたと思う。

もちろん化学肥料などは一切ない時代で、畑に蒔く肥料といえば人糞であった、それを集めに行くのは大変な仕事だった。大人がリヤカーを引き、子どもは後ろから押して歩く。当時のガタガタ道を運ぶのは容易なことではなかった。当時、それは「浮間の香水」といわれていた。

経験しなければ分からない。言葉だけでは伝えきれない。それが戦争体験である。

容易に戦争ができるような状況を作ってはならない。それだけは伝えたい。

ハニーバケツ
赤羽の陸軍被服本廠跡の米軍施設です。米兵らは肥桶をハニーバケツと呼びました。
戦後の被服本廠跡（渡辺肇氏撮影）

戦後の体験

村上　房由（北区赤羽西在住）

戦後七十年、私は当時五才。父は軍指定の菓子工場でしたので戦争に行かずに済んだ。墨田区本所に生まれ育ったが戦火が激しくなり「この近辺は大変な被害を被る！」という父の信頼する易者の言葉に足立区小菅に引っ越した。お蔭で三月十日の東京大空襲は免れた。家族は父の生家である富山県に疎開し私はお寺の幼稚園にワラで編んだ靴で通ったことや遠くの町に焼夷弾が落とされて燃えているのを覚えている。小菅に戻ると大きな工場だった家は見ず知らずの人々が一杯で私達は六畳の一部屋で家族六人が重なるように寝起きした。とにかく物資不足で特に甘味に飢えていた。戦後も弘済会（今のキオスク）の仕事だったので甘味には恵まれた。

近くの荒川に行き一匹のエビガニを捕まえてその肉を餌にして数十匹捕まえて帰り夕食のおかずにする家も有った。アメリカ兵がジープで通ると「ギブミーガム、チョコレート…」と追いかけた。ハーシーチョコレートなど貰ったら台紙の匂いを嗅いで楽しみチョコレートを食べようとしたら虫に食われてなくなっていたことも。物々交換が当たり前でお砂糖、白米などは超貴重品だった。配給券がなければ物も買えず、今日は白パンが配給だ！となると長蛇の列が出来たほどで今では考えられない時代だった。

昭和二十四年七月、学校に行く時に東武線と常磐線の交差線路上で大勢のおまわりさんがいたのを覚えている。今でも自殺か他殺かと話題になる国鉄副総裁下山事件である。住居地は低地で毎年洪水に見舞われるのを嫌った父は高台を探し現在に至っているが近くに軍の施設が在り昭和二十五年に始まった朝鮮戦争により多くの雇用が生まれた。仕事帰りにはＭＰによって弁当箱の中までチェックされて物資の持ち出しを厳しく検査されていた。

昭和二十八年、中学二年に修学旅行に北陸方面に行った際、ある駅から数人の担ぎ屋さんが入ってきて私達の座席下に米袋を置き始めた。担任教師が「子供たちの前で止めて下さい！」と大声で抗議していた。この年に三年に及んだ朝鮮戦争も終わった。戦後七十年という節目の年を迎え何時までも不戦を誓い世界の平和を訴え続ける国であって欲しいと願うものである。

私の戦争体験

土田　一郎（北区岸町在住）

私は昭和十九年三月二十日浜松第百三十部隊に入隊し、朝から晩までトトツーの繰り返しの通信訓練後測定班に任命されました。一期の検閲を終え七月三十日に転属、私の母隊「宇都宮教導飛行師団」で新しく編成された宮坂航測中隊に配属されました。そこで後に小隊長となる見習士官の面々と出会いました。方探小屋(方向探知機)の設置が済むまで軍隊教育のお淩いです。この間に中隊長の人柄を知り、尊敬できる一生の師を、得た思いでした。

測定訓練が始まると、「ホイウホッ・・・」方位の知らせが日課となりました。「秋深しホイウホッ・・・で日が暮れる」私の冗句です。一日八時間もの強行飛行で隊長のお体が心配になった頃、専任士官の出口中尉が来られ一安心しました。以後出口中尉の「ホイウホッ・・・」での明け暮れです。相手代われど人変わらずの毎日でしたが、通信理論の講義や数学の試験などもあり軍隊ボケを痛感したものでした。

十月二十六日「明朝一番機（97重）に搭乗せよ」と転属命令が下りました。愈々実戦だと喜んだのも束の間、翌朝「一番機故障、命令取り消し」です。残念無念と測定訓練に戻りました。二十年元旦、中隊長の訓示で私の転属先が硫黄島であった事を知り、唖然として声も出せませんでした。あの一号機の故障が『私の運命の分かれ道』だったのかと感慨に耽っておりました。以後硫黄島の事が今日迄七十年私の頭の中に居座り続けており、死んでも忘れる事はないと思います。一月に前橋、二月に能代、三月に新潟と展開。

十六日夜、「コレヨリトツゲキスッ・・・」硫黄班玉砕　滂沱（ぼうだ）

―合掌（後に浜松班戦友から聞いた話です）

私が終戦の玉音放送を聞いたのは、青森県八戸駅前の旅館でした。油川飛行場に展開のための　機材宰領で貨車の到着を待っていた時のことでした。終戦のため、専任大尉に報告し知己の教官に事後処理をお願いして任務完了となりました。

八月三十日復員

東京大空襲の思い

尾科　芳枝（北区中里在住）

戦争が悪化する昭和十九年、女学校時代の十七才に結婚しました。式を挙げて十日目一枚の赤紙が届き、別れを惜しむ間もなく夫は戦地へかり出されました。

翌年、昭和二十年三月九日夜半より未明にかけて、米軍による大規模な空襲があり、無数の焼夷弾が降り注ぎ町全体が火の海となりました。背負ったリュックが燃えている人、赤ん坊をおぶり子供の手を引く母親、様々な人が逃げ惑う中、火の粉が飛び散る熱さから逃れる先は、小学校のプールしか在りません。私は両親と共にプールに飛び込みました。プールの中はすでに沢山の人で溢れ周囲で「熱いよ、怖いよ」と泣き叫ぶ子供の声、「南無妙法蓮華経」と合掌する大人達、隣りで幼子に「お姉ちゃん寒いよ」と泣かれながら、夜を明かしました。

翌朝、焚き火でびしょ濡れの衣服を乾かし冷えた体を温めていると、傍らで兵隊さん達によるプールの底からの引き上げが始まりました。死体、布団、毛布、自転車等様々な中に父の溺死体が有りました。母は見つかりませんでした。町は辺り一面全て焼き尽くされ焼け野原、数キロ先の隅田川の向こう岸が見渡せる程でした。翌日から母を捜しに焼死体の転がる焼跡を何日も歩きましたが見つかりませんでした。

終戦後、兵隊さん達の帰還が始まりました。人づてに夫が既に帰国していると聞き、浦賀の病院をいくつも探しました。やっと病院を突き止め駆けつけたところ、そこにあったのは七日前の死亡診断書と遺骨でした。

最後に、家族の命が奪われる苦しみは言葉にならず、私と同じ思いは誰にもさせたくありません。どうか「戦争のない日本」で在って欲しいと、切に願っております。

（これが戦争です）
十七才で夫を戦争に
十八才で両親が死亡
十九才で夫が戦病死
家族全員奪われて
「私は一人ぼっち」
になりました。

東京での空襲

江川　平三（北区赤羽台在住）

私は浅草（合羽橋付近）で生まれ、十四歳の時ちょうど終戦の年に体験した事が今でも思い出されます。

蔵前高等学校で半日勉強、午後は勤労動員として近くのリュックサック等を作る工場で働きました。

三月九日、警戒警報が鳴り防空壕に避難し、落ち着いてから家に帰る途中三軒先に爆弾が落ち二～三メートル飛ばされました。幸いにも怪我はなく帰宅出来ましたが、家の防空壕も爆弾が直撃され道路上に出来ている防空壕に逃げ難を逃れました。空から降り注ぐ爆弾の形が今でも思い出されます。

爆弾と共に、東京は木造住宅が多いためか、焼夷弾がカラカラと音と共に家が焼け、人が逃げまどい、稲荷町の地下鉄に身を隠し西町小学校に避難しました。

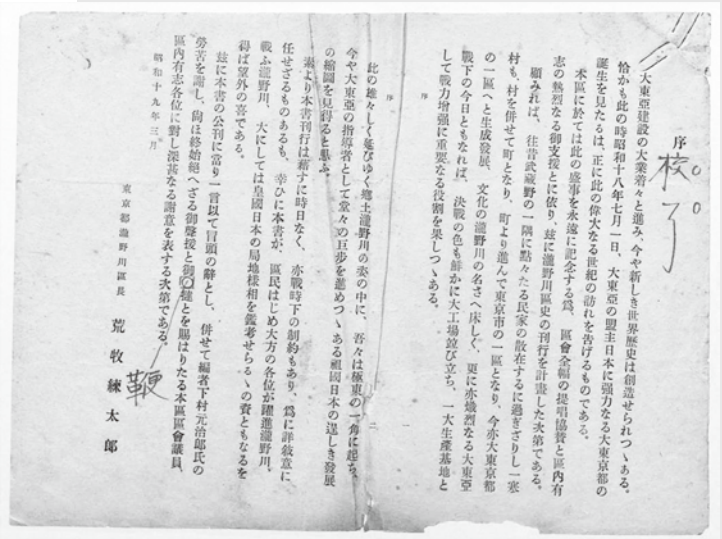
空襲も終わり跡形もないであろう家に帰ると、浅草の松屋まで見渡せる風景に戦争の恐ろしさを知りました。

その後、越谷の親戚に歩いて逃げたのが心に残る思い出の一つです。

追　兄が沖縄で戦死してます。

刊行されなかった昭和十九年の『滝野川区史』

戦争中、様々な理由で出版事情は悪化していきました。昭和十九年（一九四四）三月に刊行が予定されていた『滝野川区史』も、世に出されずに終わった本の一つです。いわゆる、ゲラの校正（仮刷りを赤ペンで修正すること）まで終了していました。出版できなかった理由は、単純に紙不足の問題なのか、それとも敵国に工場などの情報を知られないようにする「防諜」のためかは不明です。現在『滝野川区史』の仮刷りについては、図書館で、その複写本を読むことができます。



序

校了

大東亞建設の大業着々と進み、今や新しき世界歴史は創造せられつゝある。
恰かも此の時昭和十八年七月一日、大東亞の盟主日本に勃興なる大東京都の誕生を見たるは、正に此の偉大なる世紀の訪れを告げるものである。
本區に於ては此の盛事を永遠に記念する爲、區會全員の提唱協賛と區内有志の熱烈なる御支援とに依り、茲に瀧野川區史の刊行を計畫した次第である。
顧みれば、往昔武藏野の一隅に點々たる民家の散在するに過ぎざりし一寒村も、村を併せて町となり、町より進んで東京市の一區となり、今亦大東京都の一區へと生成發展、文化の瀧野川の名さへ床しく、更に亦熾烈なる大東亞戰下の今日ともなれば、決戰の色も鮮かに大工場竝び立ち、一大生産基地として戰力增強に重要なる役割を果しつゝある。

序

此の雄々しく甦ひゆく郷土瀧野川の姿の中に、吾々は祖國の一角に起る、今や大東亞の指導者として堂々の巨歩を進めつゝある祖國日本の逞しき發展の縮圖を見得ると思ふ。
茲より本書刊行は都合に時日なく、亦戰時下の制約もあり、爲に詳敍意に任せざるものあるも、幸ひに本書が、區民はじめ大方の各位が瀧瀧野川、大にしては皇國日本の局地様相を顧考せらるゝの資ともなるを得ば望外の喜である。
茲に本書の公刊に當り一言以て冒頭の辭とし、併せて編者下村元治郎氏の勞苦を謝し、尙ほ終始絶へざる御聲援と御鞭撻とを賜はりたる本區區會議員區内有志各位に對し深甚なる謝意を表する次第である。

昭和十九年三月

東京都瀧野川區長　荒牧練太郎

『滝野川区史』の序文。「大東亜建設の大業着々進み」から始まっている。「校了」の字から、発行の直前まで進んでいたことが分かる。

東京大空襲と終戦と父

鈴木　昭司（北区赤羽台在住）

その時、私は、東を向いて、疎開先の家の庭先から東京の空を眺めていた。高い空は、東へ向かう多数のB29編隊で埋め尽くされていた。高射砲の砲弾は、それに届かず遙か下で炸裂して、その砲煙に見え隠れする。其れに絡む日本の戦闘機は、勇猛果敢ではあったが、編隊の一角も崩すこともなく、その牛の尻に絡む蠅の如く尾の一振りで散っていたのは、哀れであったと、記憶している。

当時、集団疎開か縁故疎開に分かれて、小学二年生の同級生は夫々に離れて行った。私は幸い縁故疎開組で東京の隣の県（埼玉県）今の戸田市（笹目村）に父の縁故を頼って家族一同引っ越したのは、親戚の葦葺き屋根の一軒家でした。ここから父は、東京の赤羽の会社まで、自転車で通っていた。会社は火薬を製造していた関係で、終戦間際、敵国の戦闘機による襲撃を受け、所長がその犠牲になったと聞いている。当時は、全国的に導火線などが鉱山で使われ、技術指導で結構出張が多かった様に覚えている。休日には親戚から借り受けた田圃の手入れに、父を手伝って三キロ離れたところまでリヤカーに肥桶を乗せて田舎道を通ったものです。家の庭には、季節の手作りの野菜栽培で溢れ自給自足できる状態にあったのは、大家族としては、此れまた、恵まれていました。此れも家族を飢えさせてはならない、父の配慮からだろう。「サツマイモ」の産地として有名な埼玉県は、当時、「白鷺」も多く生息しており、機銃掃射の標的ともなって、警戒警報発令とともに田畑にいる者は木陰に隠れたものでした。

終戦は、遠い田圃にタニシを取りに行き戻った家の庭先で、ラジオから流れる玉音放送を聞いた。ここに至って戦後七十年を振り返って、東京の空襲と生命を何とか守ろうとする姿、冒頭に述べた、疎開先から東京の空を見た時、勇猛果敢な日本の戦闘機の英姿が、未だに脳裏に焼き付いているのは何故であろうか。

三月十日の大空襲

冨樫　安江（北区西ケ原在住）

孫たちのあどけ無い顔を見ていると、平和の有難さをしみじみと感じ、嬉しさが込み上げてきます。

私は昭和二十年三月十日の大空襲に遭遇し本当に恐ろしい体験をしました。私の生まれた土地は深川雲光院の近く白河町と云うところです。

三月九日夜、空襲警報のサイレンが闇夜のしじまを破る様、悲痛な響が鳴り渡るや、間もなく焼夷弾がバラバラと投下されはじめました。

父が「早く逃げろ！グズグズしてないで早く早く！」と叫んでいるのを聞きながら無我夢中で逃げ惑いました。

父は町内の消防団員として、当時若い男性の殆どは戦地に征ってしまい、銃後は父のような高齢者が地域の安全や面倒を見ていました。

私が云うのもおこがましいかもしれませんが、父は体格も良く、無口でしたが責任感の人一倍強い人で、町内の人々をなんとか守っていこうと一生懸命だったのです。

父は、みんなに指示しながら隣組のほうへいってしまったので、母や弟達と私は、日頃から橋のたもとにある味噌屋の地下防空壕に逃げるように言われておりましたので、その方向に向かいました。

三ツ目通りを左に行けば味噌屋なのに、なぜか真っ直ぐに駈けて、元加賀小学校の講堂に飛び込みました。周囲は風が唸り火の海と化しています。生きた心地もなく虚脱した心境で立ちすくんでいると、其処に母と弟が入ってきました。顔見知りの方も何人かおりました。

持ち出した荷物に火がつき、それを消すのにそれはそれは大変でした。おそらく半狂乱の状態だったのではないでしょうか。そのたびに外へ出ようとしますが、外は烈風に火の粉が舞上がり、まさに地獄絵図さながらでした。

暁方近く、やっと火の勢いも下火となり、家族の名を呼ぶ声があっちこっちから聞こえてきます。その時、「田中はいるか！田中！田中！」と父の呼ぶ声です。見ると顔は煤だらけ、頭巾をかぶった父の顔も一瞬誰かと見間違えるほどでした。

嬉しさの余り云うべき言葉もなく、お互いに無事だったことに母とともに、男の父さえも涙を流し、嬉し泣きに泣きました。

「あれっ！昭二（弟十四才）がいない」と、すぐ父は探しに行きました。

お昼頃、家の庭には大きな桐の木がありましたが、焼けて小さくなったその前で、弟はぼんやり立っていたそうです。

砂町のほうまで火に追われて逃げて行ったとのこと、父の顔を見て縋り付き泣いたとのことです。

わが家は皆無事でした。

後からの話で、味噌屋に逃げ込んだ人は、防空壕に火が入り全員亡くなったそうです。父は火の状況を見て防空壕は駄目だ、危ないから前の原っぱへ逃げるよう、声をからし、火の粉を振り払いながら誘導したそうです。（後日原っぱへ逃げた人から、おかげさまで助かりましたと礼を云われたそうですが）その時は殆どの人が怖くて壕から出ることができず、焼死されたとのことでした。

私たちは、その日のうちに下総中山へ向かいました。叔母達親子も二月に焼け出されて疎開しておりましたので、歩いていったのです。

その後の話になりますが、私の家の左隣の家は幼い子二人、右隣はお母さんが亡くなったそうです。近所の友達の家でも親兄弟を失わない人はいないくらい、わが家でも長兄が南方戦線で戦死しております。

本当に戦争ほど恐ろしいことはありません。

間もなく七十年目の三月十日が来ます。

横網町の戦災復興記念堂（震災記念堂）へ今年もお参りに行くつもりです。横手の門の前に主人の実家があったと聞いて、縁があるんだなあと思っております。

その後、大田区上池上の親戚の家作に世話になりましたが、そこも五月の空襲で焼け出され五月末には母の生まれ故郷の新潟県三条へ落ちのびてゆきました。

私の十七才の青春は、本当に陰鬱で悲しい毎日だったのです。

空襲犠牲者の慰霊のために

東京都慰霊堂には、身元不明の空襲犠牲者の遺骨が納められています。その中には、北区の公園に仮埋葬されていた遺骨も含まれています。

東京都慰霊堂（墨田区、東京都立横網町公園内）

横浜大空襲の思い出

野村　英男（北区志茂在住）

昭和二十年五月二十九日、横浜の空は朝から雲一つなく晴れ渡っていました。その日は珍しく朝から警戒警報が発令されていましたが、何時もの事と気にもしないで出勤しました。

作業の準備に取り掛かろうとした時です、けたたましく空襲警報のサイレンが鳴りだしました。慌てて外に出て空を見上げましたが飛行機の姿は見えません。しばらく見ていましたら、高射砲の音が聞こえたのでその方を見ると、銀色に光るB29の大編隊がこちらに向かって来るのが見えてきたのです。そのあと直ぐ、ザーと雨が降るような音が聞こえてきて、それが次第に大きくなりゴオーっと轟音に変わってきたのです。これは危いと急いで船台の地下にある電気室（避難所になっている）に飛び込みました。

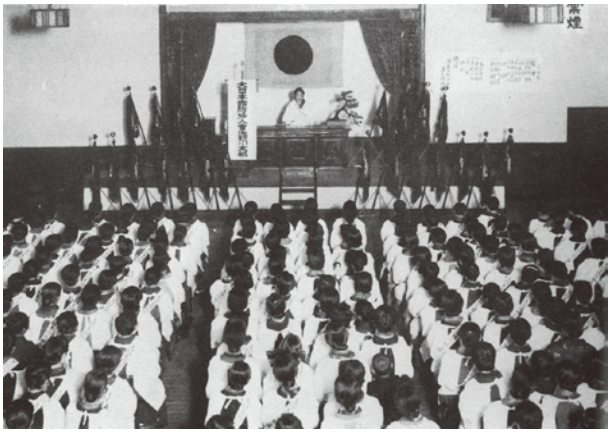
暫くして外の様子を見ようと出て見て驚きました。昼間だと云うのに真っ暗なのです。空は真っ黒な雲（煙）に覆われ、市街地のあちらこちらには真っ赤な炎が上がっているのです。それに見とれていると急に頭の上を米軍のマークを付けた戦闘機が数機、機銃掃射をしながら飛んで行くのです。ビックリした僕は慌てて近くの物陰に隠れました。しかし、それは僕を狙って撃ったのではなく、数十メートル先の岸壁に停泊中（修理のため）の駆逐艦が標的だったのです。駆逐艦も必死に応戦していましたが、撃ち落とすことはできませんでした。僕も震えながらそれを見ていましたが、九死に一生の思いでした。

午前十一時頃には爆撃も終わって静かになったので工場内を点検して回ることにしました。広い工場だからどこか傷ついた所がないか、不発弾はないかと見て回りましたが、工場内には一発の焼夷弾も落ちてはいませんでした。しかも、工場は市街地と京浜東北線の高架で遮られているため延焼も免れたのです。

午後も作業は出来ないため、早めに帰るように言われました。社門を出て市街地を見て驚きました。鉄筋の建物が所々に残っているだけ、見渡す限り焼野原、道路の両側には真っ黒に焼けた焼死体がゴロゴロと転がって地獄絵を見るようでした。又空地には焼夷弾が林のように突き刺さっていました。宿舎に帰るまで歩いて約三十分、焼け残った家は一軒もありませんでした。

約六十八分で壊滅した横浜市街地
（開始約九時二十分～十時三十分）
爆撃機B29五百十七機・P51戦闘機百一機
焼夷弾四十三万個
死者約三千六百五十人〔横浜の歴史より〕

割烹着を正装とした国防婦人会



大日本国防婦人会滝野川支部の大会（榎本和子氏提供）

国防婦人会滝野川支部役員の集合写真（榎本和子氏提供）

愛国婦人会と国防婦人会が犬猿の仲だったのは有名な話です。区内でも、赤羽周辺などで、昔話としてその対立ぶりを聞くことがあります。似たような団体ながらも、その気風は正反対で、今風に言えば、セレブの愛国婦人会に対し、庶民派の国防婦人会ということになります。例えば、戦没者の公葬に参列する時、愛国婦人会が喪服姿だったのに対して、国防婦人会は、あえて割烹着姿で参列しました。これらの写真のように、国防婦人会は、大会を開催する場合にも、集合写真を撮る場合にも、大衆的な性格を前面に押出し、割烹着姿を正装としていたのです。しかし、戦時体制の中では、そのような対立さえゆるされませんでした。昭和十七年（一九四二）この二つの団体は、大日本婦人会へ統合されました。

少年五才、戦争の記憶

横尾　城治（北区豊島在住）

一九四四年夏、名古屋市内、近くに軍の工場があった。

応接間のあるモダンな二階家に住んでいた、五才になったヤンチャ坊主の戦争の記憶です。幼稚園から帰るといつも外で遊んでいた。空には米軍の飛行機が自由に飛び日本軍の高射砲がボンボンボンとさっぱり当らず弾の上をB29がゆうゆうと飛ぶのをみていた。

その時がきた。応接間の下に防空壕を掘ってあるが入らない。焼夷弾が家に命中したらムシヤキになってしまうから。

ものすごい数のB29がおそってきた。焼夷弾がもえながら落ちてくる。ななめ向いの二階家にきらきらしたのが直撃した。二階に居た人に命中、即死と聞いた。ついにわが家も直撃された。きのう押し入れにいれた配給米（白米）といっしょに、五才までの生きたしるしはすさまじいまっ赤な火とともに灰となった。「くいもののうらみは一生もの」というのは本当だ。

その頃の「隣組」は、焼夷弾でやられた家族には、次の日の朝大きな白いおにぎりを一個くわしてくれた。当時の日本軍が飢死による戦死が半分以上のときに、五才の少年にはただただうまかった。

五才の少年には、家をやかれたあととんでもないことが待っていた。父が突然あらわれて「お前どっちにいくか」と聞いてきた。大好きな母は一才の三男をおんぶして防空壕のそばに立っていたが、上の兄と私にはなにもいわず去っていった。大垣の実家に行ってしまったのだ。父といっしょにいくというのを聞いて落たんした母の行動だったと思う。一九四四年夏、さまざまな苦労の始まりがスタートした瞬間だった。

赤羽鉄橋に残る空襲の傷あと
昭和20年8月10日の空襲では、赤羽の鉄橋（新河岸川橋梁）も被災しました。
右側、上の方にリベットが見えないところがあります。ここが着弾箇所を補修した部分だと言われています。

戦争体験七十年

桐生　一正（北区赤羽台在住）

昨日の事の様に鮮明である。昭和十九年、十九才繰下げ徴兵検査通知である。二月某日朝四時に起きる。外は三十糎の大雪である。バス電車乗物は動いていない。向島から本籍地王子まで歩くしかない。五時三十分家を出る明治通りは真白でこれでは時間に間に合わないと思うので通りがゝりの交番にかけ込む。憲兵隊に連絡を乞う。遅れても来いとの返事。はや全身汗みどろ。やっとの事、王子の飛鳥山の坂に一時間以上遅れてしまい、到着。桐生、来ました。直立不動である。オイ遅れたの水汲んで来い。ブリキの馬穴を渡される。水呑場はどこも凍りついて蛇口からは一滴の水も出ない。戻り報告する。そうだろうようし検査をする。腕を上、横、下、全部動くか。最後に淋病の検査をする。越中フンドシをはずせ、ヨーシである。第一乙種合格、自ずと軍隊調で有難うございました。召集を待つ身となる。いよいよ本土空襲の前ぶれか四発の大型飛行機が一機が偵察に来た。なす術がない。二月と言うに薄い半袖シャツ一枚、アメリカの兵隊で顔まで見えた。後にB29と知る。情報のない時代でもある。唯一のラジオに頼る。次に学童疎開の弟を引取りにゆく為上野駅から新潟行の夜行列車にのる。高崎を通過してまもなく停止。一時間とも二時間とも。上野方面は火の海と化している。空襲である。三月九日の下町大空襲である。やっとの事、加茂の実家に落つく。暇もなく向島の家族一同六人が罹災して来た。この大勢で世話になる訳にゆかない。急きょ長野に。これも駄目。結局は山梨県笹子の会社を頼るほかはなく、四月と五月、京浜工業地帯の空襲に逢う。焼夷弾の総攻撃である。

一米四方に三本から五本雨霰である。生ゴムの六角型の筒が火を吹いて来る様はそれは壮観である。落下の途中、軒先、羽目板、はては靴までが焼ける。生ゴムを取出しゴムのりに使用もした。いゝものを考へたものだ。戦争も不利と思える程の惨状である。書き出しては、きりがありません。生きている事も不思議である。八十九才翁

戦争体験文

高橋　君子（北区赤羽台在住）

私は東京とか、広島のような戦争の身近な、こわい思いの体験では有りませんが、十四、五才の頃の大分前からの太平洋戦争で、秋田のこんな田舎に迄敵の飛行機が飛んで来る事はないだろうと父と母が話して居たのですが、終戦近くになって私が十五、六の時、あんな片田舎に迄アメリカの飛行機が飛んで来たので皆びっくりしたのです。はるか山奥の一番高い山のてっぺんに、父が後になって話してくれましたが、そこには小さなお宮があってそれを目がけてショウイダンを落したとの事でものすごい大きな音が聞こえて、それがはじけたようでびっくりしました。その四、五日前の夜には、其の頃は毎晩のように空襲警報が有って、夜は電気のカサに黒い布で巻き、明りが外にもれない様にし電気の下だけで回りはまっ暗です。秋田県には私の家よりずうっと北の方に土崎港が有って、そこには大きな有名な鉄工所が有るので、そこを目がけて敵の飛行機に何回も爆弾を落され、家はずい分はなれては居ますが、家の屋敷には大きい防空壕が造って有ったので其の中ににげて居ましたが夏でしたのであつくてたまりませんでした。それでもがまんして入って居ました。父は消防団員だったので空襲警報が鳴るとそこに入り、母の指図で子供達はうごいて居ました。父は警報が鳴ると家には居ませんでした。土崎港に爆弾が落されるのは夜ばっかりで北の方を見ると其の度に空が真赤になって見えました。それに、落された時はものすごい大きな音でこわい思い出です。

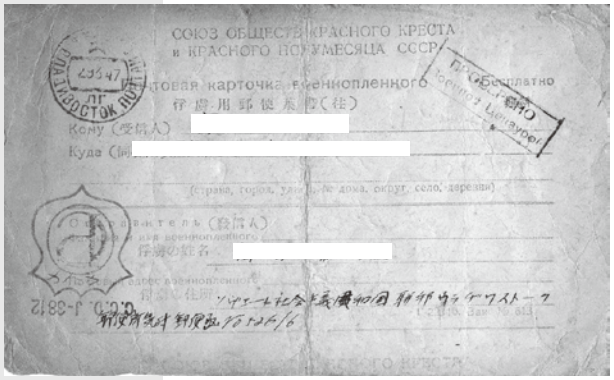
私の家の近くに、広い〳〵野原とあちこちに林が有ってそこに飛行場を造る事になって、飛行機が飛び上る時に、家の屋敷にはかっこうの良い大きな松の木が有ったのですがそれを切ってくれと言われ、父はいやとも言えず泣く泣く切られてしまい、半分から上は切られてしまいました。父も消防団に入ってる以上はいやとも言えないで切らせたのですが戦争が終って少し気持が落ち付いたら、松の木はほんとうに惜しかったと、一人ごとを言ってました。それからずい分たってから母と近所のおばさん達と田んぼの草取りをして居る時も、時々空襲警報が鳴り出して、敵の飛行機は来なかったけれども、私はカスリの着物に赤いもようの帯をしめて居たので帯が目立つからと言って母

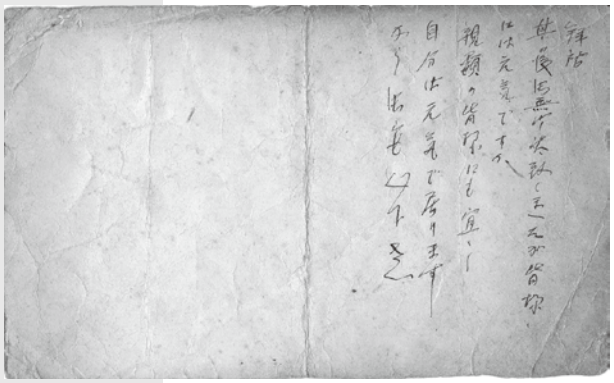
が田んぼのあぜ道の長い草を取っては私の帯をかくしてくれたと言って、後になって近所のおばさん達の笑い話となって話した事が何十年もたった今でも思い出されます。今は母は亡くなって居ませんが親が子を思う心が有難く思い出されます。私にして見れば遠い昔のように思い出されます。私は今八十六才ですから遠い遠い昔の事ですがもう二度と戦争など有ってはなりませんね……

シベリアからの手紙

第二次世界大戦の後、ソ連軍の手により、多くの日本人が、捕虜としてシベリアなどに抑留されました。帰国を夢みながらも、寒さや飢え、強制労働などにより、たくさんの人々が、異国の地で命を落としました。

終戦から少し時が経つと、抑留者から日本で待つ家族のもとへ、葉書きが届くようになりました。区内で待つ家族のもとにも「俘虜用郵便葉書」と印刷された郵便が届けられています。「拝啓　其の後御無沙汰致しましたが皆様には元気ですか、親類の皆様にも宜しく。自分は元気で居りますから御安心ください。」これが、その全文です。半分以上空欄のまま、挨拶だけで終わっています。具体的なことを書くことが一切ゆるされない中での精一杯の文章だったのでしょう。その苦しみが、しのばれます。





写真右上：シベリアから区内の家族に送られた葉書。差出人の住所には「ソヴエート社会主義共和国聯邦ウラヂヲストーク郵便所気付郵便函」とあるだけで、差出人が、どこにいるのかは分からないようになっている。
富田幸雄氏提供

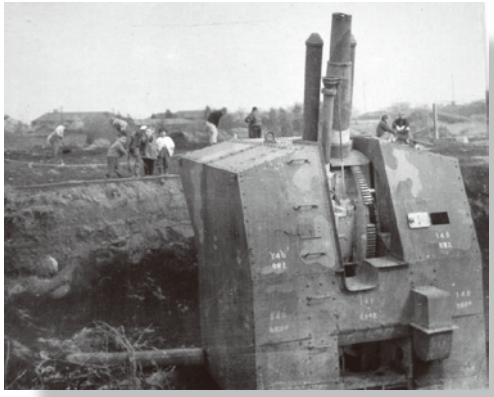
写真右下：上の写真の通信面。半分以上を残して、ペンを置いている。検閲のため、自分がどこに居て、何をさせられているのかなど、具体的なことを書くことはできなかった。

艦載機による機銃掃射の恐怖

山下　茂（北区赤羽北在住）

小生九歳の時、学童疎開ではなく、姉の嫁ぎ先、山梨県初鹿野に疎開していた。昭和二十年四月十日、大和小学校には事前に手続きを済ませていたようで、父親が突然迎えに来て、赤羽に連れ戻された。切っ掛けは、三月十日の東京大空襲で、今後いつ地元赤羽にも大空襲があり、小生一人が生き残っても可哀想だ、と言うのが父親の考えだったようである。その杞憂が二日後に来るとは夢にも思ってはいなかったが、現実に起きてしまったのである。

四月十二日午前十一時頃だったと思う、ラジオから「赤羽地区空襲警報」と言うのを聞き、斜め前の家に母親が居たので、知らせに家を出て石田さんの家の裏に来た時、川口方面から艦載機グラマンが高度を下げながらこちらに向かって飛んで来ました。操縦士の顔が見えたと思ったその時、いきなり機銃掃射をして来ました。反射的に桐の木に身を避けましたが、一メートル位脇の井戸のトタン屋根をダダダダッと打ち抜いて行きました。その場に腰が抜けたようにして座り込んでいたら、母親と石田さんのおばさんが来て、抱えられるようにして我が家の防空壕に避難しました。暫くすると爆風で防空壕のフタがパタンと開き、生暖かい風が入って来て、生きた心地がしませんでした。静かになったので外に出ると、我が家を含め近隣の家は焼けませんでしたが、担架で腕の無い人や足の無い人等が運ばれていて、辺り一面煙っていて異様な匂いもあり、恐怖で暫くは震えが止まりませんでした。翌十三日の夜から十四日の明け方にわたり王子・滝野川地区で大きな被害が出た北区大規模空襲がありました。恐怖体験しに帰ってきたようなものでした。



砲身が切断された高射砲
赤羽工兵隊の演習場にあった日本陸軍の高射砲です。戦後、米軍が砲身を切断しました。砲弾が発射されると付近の家は振動し、窓ガラスが割れたと言います。
現在の桐ケ丘団地　昭和20年代（渡辺肇氏撮影）

勤労動員

酒井　稔（北区志茂在住）

昭和十九年（一九四四）十五才、中学三年、群馬県の小泉飛行機工場で、海軍の零戦、銀河の製作に動員された。

どのように生活をしたのか、思い出すまゝに書くことにする。

小泉駅頭では、吹奏楽隊の演奏で歓迎を受け、気持ちが高ぶった。服装は、国民服に、国民帽、宿舎は工員寮で、四名一部屋すべて軍隊式で、夜警も交替で、行った。

工場の中へ入る時は、指揮者が「歩調とれ」の合図で、歩調をとって入場した。

私の仕事は、銀河の両翼にある燃料を入れるタンクを取り付けることだ。腰のベルトにスパナーを差し込んだいで立ちである。

食べ物が足りなくて、いつもお腹をすかしていた。かねの茶碗に一杯しか与えられなかった。家に居れば、何かしら食べられたのにと思った。その頃の写真をみると皆やせこけていた。心配した父兄は、交替でお米を持って訪問し、雑炊を作って食べさせてくれた。とてもおいしかったことをおぼえている。

衛生状態も悪く、お風呂も上級生の後だった。洗濯もままならず「しらみ」の餌食になり、昼食後に陽だまりで、しらみつぶしの連続であった。

勤務も昼夜あり、夜勤も経験した。夜勤の時は、部屋を暗くし、寝ることになっているがよく眠れなかった。

国策にそった行動とはいえ、このような、事実が行われない世の中にして行くことが大切である。

勤労動員で爆死した旧友の遺影を囲んで
工場などに勤労動員された生徒の中には、事故や空襲により亡くなった人もいました。
城北高等女学校の第三回生、勤労動員中に工場で爆死した田中さんの写真を囲んで。
（城北高校の刊行物より）

一生、忘れられない夜

中村　康子（北区豊島在住）

終戦の年の東京は三月十日の下町の大空襲に始まり毎夜のような敵機の来襲に私たちも防空服のまゝ床に就く日が続いておりました。そして五月二十五日の夜が来ました。七十年過ぎた今でもあの恐ろしい夜のことは、つい昨日のことのように心に鮮明に灼きついて忘れることはできません。豪雨のような音と共に降りそそぐ焼夷弾。あっという間にあたり一面火の海となりました。防火用水の水を頭からかぶり隣組の人たちと声をかけ合い、避難を始めました。

御近所でも誰も姿を見せぬ家があり名前を呼ぶと小学校一年生の男の子が玄関まで出てきましたが、すぐ燃えさかる火の中に戻ってしまいました。

明け方九死に一生を得て灰燼（はいじん）に帰した我が家に辿りついた時その子は焼夷弾の直撃で倒れた母親の傍で焼死していました。母親を離れて逃げることが出来なかったのです。焼け焦げたその子の額には学帽の記章だけが残って焼き付いていました。今の日本は平和です。でもあの戦争でさまざまな悲惨な体験をした人たちの平和への想いは本当に深いものです。

あの体験を語りついで若い人達に平和の有難さを真にわかってもらうことが、私たちのつとめであると思っています。

空襲体験の記録

戦局も押迫ってきて九十九里浜の沖には米軍の航空母艦がやってくるようになりました。艦載機が昼と云はずに飛ぶようになりました。女学校三年の頃から学業を放棄して軍需工場に学徒動員されるようになり、当時、中嶋飛行機が吉祥寺にあり、乗物も空襲になると動かず代田橋から吉祥寺迄の広い水道道路を歩いていきましたが、敵機のいゝ標的になりパイロットの顔が見える位いに低空飛行をされあわてゝ道路ぎわの芋畠に逃げましたが、芋の葉に打ちこまれる弾の音はいまだに忘れられません。

戦争のない平和である事を祈ります。

戦災で消失した場所　渋谷区幡ヶ谷本町二丁目

パパの手紙

岡本　幸子（北区浮間在住）

昭和二十年三月十日、東京大空襲で行方不明になった父、三十八歳だった。父は浅草千束町の自宅で、祖母、母、妹、弟二人は栃木県那須温泉で、姉、私（十歳）は学童疎開で宮城県の山あいにある鎌先温泉で、戦争のために別れて暮らしていた。父は筆まめで家族にこまめに手紙を書いた。私は週に一、二通届く父の手紙を待ち焦がれていた。父の看板字のような四角い字がとても好きでその字を真似て一生懸命返事を書いた。だんだんと似てくるのがうれしかった。ある日思いがけない父の手紙が届いた。「幸子さんはパパの字を真似しないで、きれいな字を書くように練習してください」私はびっくりしてべそをかいた。しょげた様子に寮母先生が声をかけてくれた。教科書の字を手本にしてみたら、と優しくおかっぱ頭をなでてくれた。すぐに教科書の字をなぞるようにして返事を書いた。「良く書けました。パパの言うことを聞いて一生懸命にきれいな字を書いてくれてうれしいです。幸子さんはおりこうさんで良い子です」私は飛び上がって喜んだ。寮母先生や友だちに見せて回った。何度も手紙を読み返して次はもっときれいに書こうと思った。それから何通かの手紙のやりとりがあったか…ある日夕食後一部屋に生徒を集めて少しこわい顔をした先生が静かに話し始めた。「皆さんのご家族の中でこれからお話しする方は三月十日の空襲で亡くなられました……岡本さんのお父さん……」布団をかぶって泣いた。みんな泣いた。私は涙がとぎれなかった。ごめんなさいと心の中で叫び続けた。私は毎朝朝日が差し込む廊下に一人でそっと立ち太陽に手を合わせた…戦争に勝ちますように、戦争でパパが死んでも泣きませんから勝たせてください…　パパの手紙は宝物になった。それから二カ月後私は母達と那須温泉で暮らすことになった。そして三カ月後那須温泉町は全焼した。終戦間近い八月一日の夜初めての空襲警報に驚いて防空壕へ避難した雑貨屋一家が、ローソクを消し忘れ、それが倒れて燃え広がり町が焼き尽くされた。私の宝物、大切なパパの手紙の束は、枕元に置いたリュックサックの中で灰になった……なぜリュックを背負って逃げなかったのか、自分を責め続けた。

死んでもいゝから寝たいと思った

畑中　治子（北区志茂在住）

私は生れも育ちも日本橋。最初は日本軍も強く、戦果の上がる度、東京下町では旗行列、提灯行列と賑やか。戦況が不利になり学童疎開が始ると「一人残ると可哀相。死ねばもろとも」と言う祖母の強い願いで学校に残ったが、生徒も先生も少い。空襲が激しく、警報が出ると給食のパンを貰って帰る毎日。隣組では東京が危ないその時は宮城へ逃げようと決めていた。夜は電気が外に洩れない様に黒い布を被せ、床下には防空壕を作り、警報が出る度に何度でも防空壕に入る。死んでもいゝから寝ていたいと思いました。二十年三月十日東京大空襲でB29が空から焼夷弾をボンボン落す。町中焼けるのを泣きながら見た。宮城に逃げる途中、東京駅の近く東京海上の人に、宮城には入れないので会社の地下に入る様に声をかけられ、炊き出しのお結びと一晩お世話になった事を今でも忘れません。上野へ逃げ、そこを四月に焼け出され、芝に逃げ六帖一間に八人住んでいたが、五月に又焼け、今度は埼玉の与野に逃げると食べる物がない。ある朝、祖父が道端でお結び三ヶ入りの包みを拾ってきて、水で結びを洗いお粥を作り一時すごしたり、ノビル、セリ、ヨメナも食べたりした。八月十五日。玉音放送で戦争の終りを知りこれから逃げることなく夜はゆっくり寝られると思い嬉しかったです。父が復員して来て日本橋に焼け残りの廃材で掘立小屋を作り、そこに戻るが前の人は誰れもいない。電気ガスなし、焼け野原から燃え残っている木を燃料に、水は水道管から溢れているのを使っての生活です。食べる物なく、残り少い母の和服を持って高井戸の農家に米と野菜に取り替えに母と行き、しのぎました。夜になると遙か先に見える聖路加病院の明りが眩しい。米軍が占領しています。その内に母の弟が山口の航空隊から落下傘を一つ持って復員してきた。落下傘は広げるとすごく大きく全部絹なので母が丹精してブラウスを作ってくれました。着る物も無いので嬉しかった。今は感無量。

戦争が変えた私の人生

高橋　てつ（北区東田端在住）

満州事変・支那事変・日米戦争と続き、勉強するより、勤労動員の日々でした。

学校では英語の時間はなくなり、町の英語の店名は日本名と変り、音楽もジャズから軍歌となり、人々は田舎へ疎開しました。

私は四月に明治大学女子部法律科に入学、上京して、池の端の姉の家に同居、まもなく戦争が激しくなり、毎日B29の空襲、防空壕の生活でした。

夏休みに角帽姿で帰郷、そのまゝ博多に住む事になりました。池の端の家が空襲で焼かれ、なくなりました。

私は西部軍管部司令参謀部兵站で筆生として勤務することになりました。将校の家族だけが勤務出来るのです。

戦争が激しくなり、山家の山中に移動する事になりました。毎日裸足で食事をはこび書類配布の日々でした。

八月十五日、朝食が終り食器を洗っている時、天皇陛下の終戦のお言葉をマイクで聞きました。終ったと言った気持で他の事は考えられませんでした。母からアメリカ兵が来るから山にいるよう便りがありましたが私は飛んで帰宅しました。

終戦後、考えた末、大学へ復学、卒業致しました。私の弁護士になる夢は消えていました。

新聞で東映のニューフェイスの募集があり、応募して女優となり九年間映画界で活躍をしました。

毎年八月十五日を迎え特攻隊として、若き命を捧げた若人を思い戦争の残酷さに胸がいたみます。

私は台湾・香港・米国・英国に住み国民の皆さんと仲よくしましたが皆立派な人達です。誰が戦争を始めるのでしょうか？

家族・友人を失い人生の目標を失ふ戦争は再びあってはならないと心から思います。

星に桜の学徒章
北区の造兵廠に動員された女子生徒が着用していたものです。中央の星印が造兵廠の紋章です。
東京第一陸軍運造兵廠の学徒章
（藤代喜代子氏提供・都立竹台高等女学校から動員）

戦後七十年を振り返って～学童疎開のことなど～

大久保　治雄（北区滝野川在住）

昭和十八年二月、ガダルカナル島からの撤退を境に、サイパン島の玉砕、マリアナ海戦の敗北、米軍のガム島、テニアン島への上陸と戦局は転換し、米軍機の日本本土空襲が現実味を帯びてきた。翌十九年一月には学童疎開命令が発せられた。私は小学校六年の一学期に、母方の里である千葉県南房総の和田浦という小さな町に縁故疎開をした。小さい部落のこと、配給物資を貰いにいくと、自分たちの分が減ってしまうと、よく嫌がらせを受けたものだ。昭和二十年四月に館山市の旧制中学に進んだ。中学校は館山の海軍飛行場の近くで、空襲警報ともなれば、米軍の艦載機が飛来し機銃掃射に見舞われ、近くの松林の中にある防空壕に駆け込んだものだ。そんな時いつも威張っている軍事教官（大佐）の慌てふためきぶりをみて、密かに笑ったものだ。そんな様子をみていた担任教師に、非国民と罵れ殴られる始末である。いよいよ、戦局も激しくなって、勉強どころではなく、勤労動員として、松根油の原料になる松の根を掘ったり、出征兵士留守宅の農家に稲刈りにいったりした（こんなときはお米のご飯が食べられた）。また、警戒警報の合間を縫って要塞地帯の海に。木札の鑑札をつけ、海中にもぐり火薬の原料になるカジメという海草をとったりした。

戦後、価値観が一変し、教師の態度も一八〇度変わり、先生対する信頼も一気に失せてしまった。やがて、徐々に落ち着きを取り戻し、昭和二十三年には、学制改革が行われ、新制中学（併設中学）の第一回生として世の中の荒波にほうり出された。その後、東京に帰り、昼は働き、夜は高校、大学と八年間の夜学生活を経て、四十五年余の公務員生活を終え、平成八年に退職した。現在は、兄が戦死したニューギニア方面で、未だジャングルの中に放置されている旧日本兵の遺骨の捜索、収集、本土への帰還を果たすための活動をしているＮＰＯの仕事を手伝っている。戦後七十年、未だ戦争は終わっていないというのが、正直な感想である。

生ると憂（ゆう）ことの幸せ

富樫　健一（北区赤羽在住）

北区ニュースで、平和祈念週間の見出しを見て思い浮かぶことがありまして、恐縮ですが、戦後、二十年当時のことを、自分の胸にある思い出を語りたいと思います。

私は昭和十六年（一九四一）十二月に、出生地、旧樺太本斗郡好仁村大字南名好、今のロシア、サハリンで生まれました。子どもながらも当時の恐怖が未だに忘れ物のように思い浮かびます。

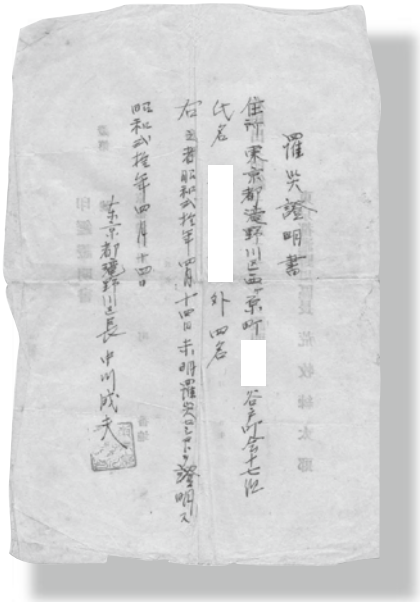
語れば、昭和二十年の戦争の終結を迎え、私ら親子四人（父母、弟、私）の生活は、いきなり暗いものになりました。ロシア人に襲われるから、ローソクの火を頼りに声も出せずに、毎日おびえて逃げ隠れしながら暮らしていました。やがて年数がたち、昭和二十二年最後の引き揚船に乗るため、六人ほどで夜道を馬車で行くと、ロシア兵士が後ろから空鉄砲を鳴らして追いかけてきました。俺ら兄弟は茶箱に入れられ、母から「草むらに落とすから、絶対に泣くな、人につかまるから」と言われ、落とされました。

当時、私は六歳、弟は四歳です。「痛かった」と弟が泣くので、口を塞いで止めました。こわかったね。俺たちを助けるため、あとから迎えに馬車が来ました。

今でも思い出しますね。やっとの思いでサハリン真岡港の集結の港場についた。子どもだった私が見た汽船は大きかった。

昭和二十二年五月五日（記録）に、樺太、真岡港出港して、五月七日、函館港上陸、船酔いで苦しかったよ。それから引き揚げ汽船で本国の宮城県仙台市の引き揚寮にて、小学校入学、半年ほど。

同年、北海道、利尻郡沓形村（その当時）に渡る。以上が戦後の体験です。



罹災証明書
空襲の当日、印鑑証明の裏面に手書きされたものです。（昭和20年4月14日、滝野川区発行）
長谷川二郎氏提供

九歳の敗戦体験

金澤　寛太郎（北区赤羽北在住）

昭和二十年八月、日本が戦争に負けた時、ぼくは九歳で、満洲（中国東北部）の日本人学校の三年生だった。ソ連が攻めてくるというので、十一日の深夜、仕事がある父を残して、母子で避難民団に合流、朝鮮へ避難列車で脱出した。そのまま帰国できるのかと思ったのに途中で降ろされ、朝鮮の平壌の収容施設に収容されて、冬を越すことになった。着の身着のまま、夏服のまま着替え無しの朝鮮の厳冬。何ヶ月も入浴も洗濯もできず、汚れた下着の縫い目には白いシラミがずらり、女性は髪にたかる黒いケジラミに悩まされた。もちろん食べるものが極端に不足し、おとなもこどもも極度の栄養失調状態へ。母親はお乳が出なくなり、満洲で生まれた九か月の弟は、終戦の翌年の正月三日の朝、口から泡を吹いて息絶えていた。冬を越す間に体力のない赤ん坊から順に亡くなり、仏はみなリヤカーに亡骸を重ねて積まれ、郊外の墓地へはこばれ、凍った地面に穴を掘ってゴミのように埋められた。三月三日には百日咳で苦しんでいた四歳の妹が、ぜーぜー咳き込み、父に背中を叩いたりさすったりされながら、痰が喉につまり窒息。ひな祭りが妹の命日になった。

われわれ避難民が空腹の身を横たえていた収容施設（旧遊廓）のドアを、夜な夜な蹴破って酔っぱらったソ連兵が乱入した。遊廓ときいて、そういう女性がいると勘違いした連中だったのだろう。「マダムダワイ」と叫びながら。土足のまま上がり込んだ兵隊たちは、押し入れから隠れていた婦人たちを引きずりだし、暴れてあらがう彼女らを押さえ込み、河原に担ぎ出して犯すのだ。この時がぼくら子供の出番だった。酔っ払った兵隊に、二、三人がかりでしがみつき、ワーワーいいながら責め立て、相手がこどもでは本気で暴れるわけにもいかず、根負けして退散するまでがんばるのだった。ときには酔っぱらった勢いでパンチをくりだしたり、拳銃を抜いて実弾で威嚇射撃することもあり、こどもには恐ろしい体験だった。

地球上で戦争を起こさないで！

今村　末子（北区浮間在住）

七十年前、満洲で終戦を迎えました。

当時私は十才、家族父（友次郎）母（ウラチヨ）長女（八江）次女（佐枝子）三女（道子）弟（政治）長男（孝志）。昭和十八年春四月十七日、日本政府の満洲開拓政策に従い、美しい故郷を離れ、祖父母、親戚と涙の別れをしました。やがて船に乗り（太平洋越え鹿児島市へ）鹿児島市内の照国神社前で記念撮影をした（昭和十八年四月十八日）。

第九次伊漢通開拓団本隊龍郷班、その日に汽車で下関に、そこから船で対馬海峡を通過、朝鮮の釜山に着き（現在の韓国）、漢城通過、北朝鮮の平壌を通過、丹東（中国遼寧省の）、瀋陽（昔の奉天→長春（ラストエンペラーがいた新京））→ハルピンに到着。釜山からハルピンまでは汽車で、それから馬車に乗り替え、方正県の三梨樹部落に着いた。その時、長い長い旅の疲れとショックで一人の老婆が亡くなった。

また、何日か経つと一部の人が本部に移り、しばらく経つとまた一部の人達を四班とか五班～九班とかに分けて住むようになりました。私たちは本部から遠い九班に行かされ、やっと辿り着いたと思いきや、満洲の極寒の冬、身を切る様な北風、忍び難い満洲の日々でした。

ある日、部落の人達は八江姉の通達を受け、着の身着のまま集合、全てを捨て伊漢通の港から船でハルピンへと。実は苏联（それん）軍に拒否され、しかたなく開拓団本部に集合となり、そこから難民達は夜も昼も歩き、疲れたら道端で寝る。老人、婦人、子供皆な祖国への夢を見て、小さい子供も大人について、やっと日本人村に着いた。村の人が言うのは日本は戦争で負けた。私達は集団自殺か・・・等、大人達は議論、私達は疲れて寝てしまった。

夜明に障子の向うの、パンパンという四発の銃殺の音に起され、恐怖のうちに又集合、前へ進めず原来の本部に歩きだした。途中で足を止めて、道端の溝に向かい合掌し追悼を表した。辿り着いた家は簡単な二段式、25㎡の一軒家に三十人以上もの人が入れられた。満洲の十月はもう雪が降っていて壁は厚い霜で、食う物なし、わらや草むしろの下にもぐり、毎日「豆頂だい、ろうそく付けて」って息を引きとる人。私の父（五十一才）母（五十才）は、その難民所で凍死しました。

語り伝える

本間　静江（北区桐ケ丘在住）

私は昭和二年一月、新潟で八人兄弟の五番目として生まれました。十二歳で母を肺炎で亡くし、十四歳の時、父も他界しました。上の姉二人は既に嫁ぎ、兄は志願で海軍航空予科練として入隊しておりました。残った五人は母の実家である直江津に引き取られました。

私は十六歳の時、上の姉の出産の手伝いのため満州のチチハルへ行くことになりました。無事出産を終え、私は関東軍チチハル市第七五八四部隊通信隊に軍属として働き始め、ソ連に近い孫呉、海拉甫北安方面の無線で通信する毎日を過ごしました。

そんな毎日を過ごしていた頃、昨日まで隣で通信していた兵隊さん五人が命令を受け、急きょサイパン島へ行きました。別れて一か月後、玉砕したと聞きました。

その後、義兄の転勤に伴い私は部隊の宿舎に入りました。二十年五月頃から忙しくなり通信所に寝泊まりするようになりました。八月に入ると現地人の暴徒で騒がしくなりましたが、忙しさのあまり通信所から出られないでいたので外のことは全然知りませんでした。十九日になり「明日ソ連軍が入るので、今すぐハルピンへ行く様に」。と言われ駅に向かいました。駅は最終列車ということもありごった返していました。ぎゅうぎゅう詰の列車で動いては止まり、止まっては動き、二十一日の夕方ハルピン駅に着き、本部の人たちと合流しました。

二十二日朝、武装解除され各部隊は銃を置き、シベリアへ抑留されていきました。残された子は父に追いすがり、妻は泣き叫び、ソ連兵は銃を向けて脅し、まるで地獄を見ているようでした。抑留されていく兵士が、振り向きながら「無事で日本へ帰れよ」と言った声が忘れられません。

家族のいる軍属は残り、日本から派遣されてきた通信隊軍属は連行されていきました。それから、残された家族の人たちとの避難生活が始まりました。野宿しながら食べるものを探し歩きました。飢えと寒さで病になる人、亡くなる人も出始めました。

ある日、満鉄の官舎とみられる空家を見つけ、そこで宿泊することにしました、そこへ、ソ連兵が来て大声で叫び、銃で脅し、指輪・時計何でも持っていきました。女子軍属の一人が連れていかれそうになり、助けに入った男の人が目の前で銃殺されました。

それから何日、歩いたこと事でしょう。やっと着いたところは青少年義勇隊農場で避難所でした。国境に近い開拓団から歩いてたどり着いた人…何百人もの人が避難所の中で、ごろ寝です。

病にかかった母親が、子どもだけでも生きてほしい一心で、手離さなければならない人もいました。孤児を買うため、現地人が来るようになりました。男の子は三百円。女の子は五百円でした。

私たちは、仕事として翌日から農作物の収穫です。義勇隊の若者が植えたジャガイモを山ほど収穫しても、ソ連兵がトラックで運んでいきます。日が落ち、鍬を担いでの帰り道、勝利の日までと歌いながら帰ったのを覚えています。

ここまで共に歩いてきた女子軍属のうち、三人はチチハルの親もとへ帰ることなり、一緒に行こうと誘われましたが、日本に近いハルピンに来たのに戻ることはないと思い、お断りし一人残りました。

その頃、避難所の中では、高熱が続く病が蔓延し、何の伝染病かも分からないまま、一日三十人以上の人が亡くなり、十五歳以下と六十歳以上の人はいなくなりました。

それから間もなく私も病にかかり、高熱で寝ていました。その時、准尉が「ここにいたら死を待つばかりだから逃げよう」と、拾ってきた靴を私に履かせ、見張りの少ない夜中に男の人三人と馬車で逃げました。

朝方、香坊で降り、仕事を探し、遠東飯店で働くことになりました。仕事中、ソ連兵が来ると、店の人が合図を出してくれるので裏口から出て隠れました。

近くに日本人はおりませんでした。いつ帰れるか知る由もなく、孤独と不安を抱えて過ごすことに疲れた頃、人の薦めもあり、同じ店で働く日本語が少しできる人と一緒になりました。

その後、幾多の苦難を乗り越え、昭和五十七年七月二十五日に帰国しました。主人は二十五年前に亡くなり、長男、長女は中国に残しておりますが、三人の子は東京で元気で平穏な生活をしています。こんな幸せが来るなんて誰が想像できたでしょう。

一番苦しかった孤独の頃を思い出し、平和で暮らせることが、どれほど大切で、笑顔と幸せを運んでくれることか。自分が幸せを感じるとき、日本の土を踏むこともなく犠牲になった人々に向けて、いつも手を合わせています。

今でも戦争で苦しんでいる国のニュースを見るたび心が痛みます。日本の平和が永遠に保たれることを祈らずにはいられません。

大連の社宅、ソ連兵侵入

鈴木　三枝子（北区志茂在住）

昭和二十年八月、敗戦の知らせに茫然とした日、私たち親子は中国・大連の満州石油の社宅にいました。前年まで大連市立弥生高等女学校で数学を教えていた夫は、戦争がはげしくなるにつれて、専門の油脂関係の研究のために、満州石油に引き抜かれたのです。

社宅は大連郊外にあり、大きなすり鉢状の配置。底の方に私たちの住宅、それをとりまき守ってくれるような形で、上の方に軍の住宅がありました。

終戦から三日ほどたった暑い日、すり鉢の上の方にキラキラ光るものが見えました。ソ連軍が槍や刀を振りかざしてやってきたのです。はじめ、軍人の家の窓に機関銃を撃ち込んでいるのが見えました。私は玄関に鍵をかけて恐ろしさに震えながら、二人の娘をしっかり抱いてじっとしていました。すり鉢の上の方から順に略奪をはじめ、底のほうに来たときは大きな鬼のような赤い顔をした暴徒のポケットは膨れ上がり、はち切れそうでした。鍵は簡単に壊され、家の中を物色していましたが、めぼしいものはなかった様子。私も子どもたちを抱いていたおかげで、何の被害もなく、ソ連軍は出ていきました。一番先に被害にあった軍の家の人たちは気の毒にと誰もが思ったのですが、すでにもぬけの殻だったそうです。終戦の前にみんな逃げてしまっていたのです。

その後、私たちはすぐに押入れの壁を破り、家に来たらお隣に、お隣に来たら家に逃げ出せるように仕掛けを作りました。再びソ連の兵士が入ってきたときは、押入れの穴からお隣に逃げ、息を潜めて隠れていました。赤ん坊だった下の娘が泣きだしはしないか気が気ではありません。娘は私の腕の中で大きな目を開け、じっと私を見上げていました。親の心が分かるのか最後まで泣きませんでした。

押入れの穴は見つけられず、危機を逃れることができました。そして「技術者はソ連に連れて行かれる」という噂が流れ、親子四人急いで市内へ逃げ出しました。

椿咲く日本 ―引き揚げ行―

満州国大連から引き揚げて六十八年。栄養不足で弱かった二人の子。私も主人もあばら骨が一本一本見えるようにやせ細っていました。

昭和二十二年二月末、引き揚げ船の甲板から港を望んだとき、甲板いっぱいに集まった人々の間から、大きなどよめきが起こりました。

もう一年引き揚げが遅れていたら、戦争で亡くなった人と同じように、間違いなく死んでいたでしょう。亡くなったかたはどんなに日本に帰りたかったでしょう。それを思うと涙があふれてきます。遠くに見える日本は赤い椿の花が満開でした。それは美しい母国。私たちはすっかり幸せになったような安堵と嬉しさに酔いました。

船を降りて、消毒のために頭からＤＤＴをかぶせられて真っ白になり、広場に集まると、ふかしたサツマイモを売っている人の周りに人垣ができていました。二人の子どもに食べさせてやりたいと思いましたが、主人はわずかな引き揚げのお金を使うわけにはいかないと、聞いてくれません。これから先、お金は大切なのです。別の班にいた祖母が買って分けてくれました。二人の満足そうな嬉しそうな顔を見てホッとしました。本当にかわいらしく愛しかった。何日もの旅で汚れた幼い顔が頭の中によみがえります。

列車が駅に止まりますと、我先に入ってくる買い出しや闇商人の人たち、窓をこじ開けて入ってきた男が、いきなり長女の顔をけとばしました。眼を開けられなくなったのです。水も布もない満員列車の中で、唾液だけがたよりでした。

それからは主人と私のリュックの上に子どもをしっかりくくりつけて、北を目指して引き揚げ行を続けました。

椿は美しく、空は晴れていたけれど、祖国も人の心もすっかり変わっていました。昔の日本ではありません。敗戦によってずたずたになっていたのです。

虱の血

神子島　良男（北区赤羽台在住）

虱、米粒から手足が生えたようなこの虫はかつての日本人にとっては大変馴染み深い生き物なのです。もし、虱、そんな虫見たことも無いと言う人が居たなら、その人は全く戦争の不幸を経験したことの無い幸福な世代に生まれた人達の仲間でしょう。

私が此の虱と出会ったのは、大東亜戦争（当時日本ではそう呼ばれていた）の末期の頃でした。其の発端は私が小学校三年生の時でした。昭和十六年十二月八日の朝、父親がラジオのスイッチを入れると、ピンポンポン、聞きなれぬチャイムのリズムが鳴りそれに続いて「我が帝国陸海軍は本八日未明西太平洋においてアメリカイギリスと戦争状態にいれり」緊張した声でアナウンサーがニュースを報じたのである。

「うーむ…とうとう始まったか」

「何が始まったのお父さん」

「戦争だよ、戦争が始まったのだよ、日本がアメリカやイギリスと戦争を始めたんだよ」

食卓の前に座りながら父親は私に説明してくれました。

「ふーん、戦争が始まったのか」

その時、私は戦争の意味がよく飲み込めなかったのです。まさか自分が両親から引き離され、つらい生活を負わされるようになるとは夢にも思わなかったのでした。

その後、新聞ラジオそして巷の映画館で、日本軍の華々しい戦況が報じられるようになったのです。太平洋戦争は当初、日本軍が真珠湾攻撃をかけて以来、先手先手と戦果をあげ英米諸国の肝を冷やしたが、戦争が長引くにつれ、国力、科学、文化が勝る英米軍にはかなわず、東京空襲の恐れも予測されるようになったのです。それは、昭和十七年四月十八日午後十二時三十分頃、突然アメリカ軍の飛行機が姿を現し、爆弾をばら撒き飛び去って行ったのです。

あまりに思いがけないことだったので、その日は朝から町の人達は防空演習をしていたのですが、演習に参加していた人達は（今日は馬鹿に本格的な演習だなー）と思っていた矢先、飛行機が飛び去ってから、サイレンが鳴りだしたので、これは本番の空襲であったかと、後から気がつくほどでした。

此の事が切っ掛けで、日本の未来を担うべき小国民を守らねばと言う事で、学童集団疎開あるいは縁故疎開が為される様になったのです。

昭和十九年の夏、私が国民学校五年生になった時、両親と別れ群馬県の伊香保町に学童集団疎開をしなければならなくなったのです。其の日の朝は雲一つない上天気でした。私達は思い思いにリュクサックを背負いまるで遠足気分で校庭に集合したのです。

校長先生の訓話の後、私達は未来にどんな苦労が待ち構えているとも知らず、はしゃぎながら校門をあとにしたのですが、その後から見送りについてくる母親たちがそっと涙を抑えているのにも気がつかずに。

もはや人影が無くなった校庭の片隅にはただ一人薪を背負った二宮金次郎が寂しそうに本を読んでいたに違いありません。

渋川駅で列車を下ろされた私達は、登山電車に乗らずに、徒歩で伊香保町に向かったのです。私達子供達にとってはかなりのきつい道程ではありましたが、途中の景色は大変素晴らしく、私達子供心にも大変美しく目に映りました。か弱い足を引きずり引きずり、やっとの思いで、私達は温泉町伊香保に到着したのです。伊香保町は山の中腹に位置しているので、町の中央は石段になっておりその両脇に旅館が立ち並んでいました。

旅館に着くと、私達は一班ごとに分けられて部屋が与えられ、班長、副班長の六年生を頭に下は三年生の七人が、一緒に生活することになったのです。

当時、自分は兄弟を持たぬ一人っ子でしたので、いっぺんに六人もの兄弟が出来た様な気分で喜んでいたのですが、現実はそんな生易しいものではありませんでした。

一日、二日はそれほどではありませんでしたが、三日四日と経つ内にそろそろ両親が恋しくなり、廊下の片隅や庭の陰で女の子が固まってしくしく泣いている様子が見受けられるようになりました。男の子は涙なんかは見せませんでしたが、一週間、二週間そして一年と経つ内に班の中にボス的存在が現れ始めたのです。班長さんはおとなしい人でしたが、副班長が嫌な人で、班長の陰にまわってなにかと私達下級生に難題をふっかけるのです。「班長さんが此の部屋で一番偉いのであるから」と言ってまるで古参兵が新兵をいびるように私達をこき使うのです。何事も班長さんが優先、布団など皆で引いてやったり、時としては、食事時に、私達下級生の茶碗から少しずつ上前をはねたりする事もあるのです。

育ち盛りの自分達にとって唯でも少ないご飯をけずられるの

ですから堪ったものではありません。しかし、皆良く我慢をしました。もし不平を言う者がいると副班長は其の者を仲間はずれにしてしまうのです。此の罰は大変辛いものなのです。部屋の者全員が彼を村八分にしてしまうのです。誰もが其の子に敵意を持っているわけではないのですが、副班長の命令でそうせざるをえないのです。もし命令に逆らえばいつ自分も村八分にされてしまうかもわからないのです。

其の子は誰にも口を聞いて貰えず、そして寒い冬になっても炬燵に入れてもらえず、部屋の片隅で蹲(うずくま)っている様子はとても可哀相でした。

私達の部屋に三人の姉を持つ末っ子の長男がいました。彼は女ばかりの兄弟に生まれた末っ子であったせいか大変負けず嫌いで人に屈服するのが大嫌いな性格の持ち主でしたので、それが為に、何時しか彼も仲間はずれにされてしまったのでした。

私は東京に居た頃、両親が働きに出ていた鍵っ子でしたので孤独には慣れていたのですが其の反面、孤独の寂しさ其の辛さが身にしみて良く判るのです。それに彼とは子供の頃からの同級生でしたので、しょんぼり部屋の片隅に蹲っている彼を見捨てて置けず、進んで彼に近づきよく二人だけで将棋を指して遊ぶようになりました。当然私も仲間はずれにされましたが、二人一緒に仲間はずれにされると言うことは、お互いが一人ずつ仲間を持っていると言う事になるのです。たとえ二人が炬燵に入れてもらえなくとも、二人が向きあって足を重ねて毛布を掛ければ、充分暖をとる事が出来るのです。伊香保の冬は東京のそれとは比較にならぬほどの厳しい寒さです。私達は温泉旅館に宿泊していたので、毎晩温泉に入る事が出来ましたが、風呂から出て自分達の部屋に帰るまでに、手拭がこちんこちんに凍ってしまうほどの寒さでした。また其の寒さに加えて私たちを苦しめたのは虱の発生です。天気の良い日には日向に出て虱取りをしたものです。しかし、虱は増える一方とても取りきれるものではありません。

夜、下着を窓の外の手摺に引っ掛けて、朝になると凍結し真っ赤になって死んでいる虱を振り払って退治しても、卵は死なないのです。やがて、卵は成虫となって私達を苦しめるのです。長男で末っ子の彼と私は二人分の布団を敷き、二人分の掛け布団を掛けて、一緒に寝て寒さを凌ぎましたので、それゆえに、私達二人の下着に生息している虱たちは二人の間を行き来して私と彼の血をそれぞれ吸い取り体内でそれを混ぜ合わせていたに違いありません。私達にとって、そんな辛い生活の中で唯一楽しい一時は両親との面会日でした。

その日は何の前ぶれもなく突然、両親が東京からやってくるのです。

良く晴れ上がった春も間近い朝でした。大広間で食事を済ませ部屋に戻ると、そこに母と父とが座っていました。

母は寒さで紫色になっている、私の両手を暖かい手で包んでくれました。其の時握ってくれた母の手の温もりは何時までも私の心から消えませんでした。

その日だけは、日頃意地悪な副班長も手の平を返したように、私を扱ってくれました。仲間はずれにされている、例の彼も、我がことのように喜んでくれました。

昼過ぎ私達親子は町の真ん中を貫いている石段を一番上まで登りつめ、伊香保町が一目で見渡せる伊香保神社の展望台に登りました。私は石垣に腰掛、母が東京からお菓子代わりに作ってくれた干飯の醤油まぶしをかじりながら、両親と一緒に居られる幸福感をしみじみ味わいました。見下ろす伊香保の町はどの旅館にも避雷針が立っており、それらが夕日に映えてキラキラ輝くまで私達親子はそこに座り続けていました。

翌日、両親が帰る事になりました。

其の時私は炬燵に入り皆とトランプ遊びをしていました。

母がそばに来て、「それじゃ帰るからね」と声を掛けた時、不覚にも私は涙を堪えるのが精一杯で、どうしても振り向く事が出来ずただ前を向いたままコックリをしただけでした。その後父は二三度面会にきてくれましたが母は一度も来てはくれませんでした。きっと別れる時の私の悲しそうな顔を見るに偲びなかったからだと思います。

例の仲間はずれの友は年が明けても母親が面会に来てくれませんでした。彼の場合、父親が戦地に取られている為に、彼のお母さんが生計を立てている関係で、なかなか面会に来られなかったんだと思います。

冬も終わり暖かい日差しが射す春がやってきました。例の彼は何時も廊下の手摺に持たれて外を眺めていました。そこから石段を登って来る様子が眺められたのです。

その日はどんより曇った昼下がりでした。春にしては少し肌寒く感じられる陽気でしたが廊下のガラス戸は開け放されていました。例のごとく彼は熱心に外を眺めていました。

「あ、お母さんだ」

突然彼は叫んで手摺から身を乗り出して、「お母さん」と呼びかけながら両手を振りました。其の瞬間あまり身を乗り出し過ぎたので彼は真っ逆さまに二階から下に落ちてゆきました。お母さんは息せき切って階段を登って来て、彼を抱き上げました。

「満男、満男」

お母さんは狂ったように呼びかけました。彼は薄目を開け嬉しそうに微笑みましたが、その笑顔には痛みをこらえる陰がありました。

私達はこの様子を知って、大急ぎで彼を部屋に運び込みました。此の時ばかりは班長さんも副班長も布団を敷たりいろいろとこまめに働いてくれました。医師が来るまで私達は枕元で心配しながら彼の顔を見詰めていましたが、可哀想にやがて彼の顔は青ざめ血の気が引いてゆくのが判りました。そしてもはや温もりの失せた彼の体から這い出してきた虱たちの身体の中にのみ彼の血が流れて居たのです。其の中の何匹かの虱には私の血も混ざっていたに違いありません。

あの忌まわしい戦争さえ無かったなら彼はこんな可哀想な死に方をせずにすんだものを。

後書き

私達が伊香保町に学童集団疎開をしていた時に、一人の学童が廊下の窓から転落死をした事故があったのです。其の事故を知った時、私は、さぞかし死ぬ前に彼はお母さんに会いたかっただろうと思い此の作品を纏めました。

北区戦後七十年誌

編集後記

戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぐことを目的とし、区民の皆さまから戦争体験文を募集いたしました。

お寄せいただいた体験文の中には、初めて原稿をお書きになられたと思われる作品もありましたが、戦争の恐ろしさと当時の生活の困難ぶりが描かれ、その内容は読む者の胸を強く打つものがあります。

ご投稿下された方々を初め、写真・資料等をご提供いただきました多くの皆さまのご協力に厚くお礼を申し上げます。

総務部総務課

発　行　東京都北区
発行日　平成28年3月
編　集　東京都北区総務部総務課
東京都北区王子本町1－15－22
☎03－3908－8623
編集協力　東京都北区立中央図書館
「北区の部屋」
東京都北区飛鳥山博物館
刊行物登録番号　27－1－123

王子区・滝野川区　学童集団疎開先一覧表

（疎開先は、原則として群馬県。滝野川の一部のみ静岡県沼津市。）

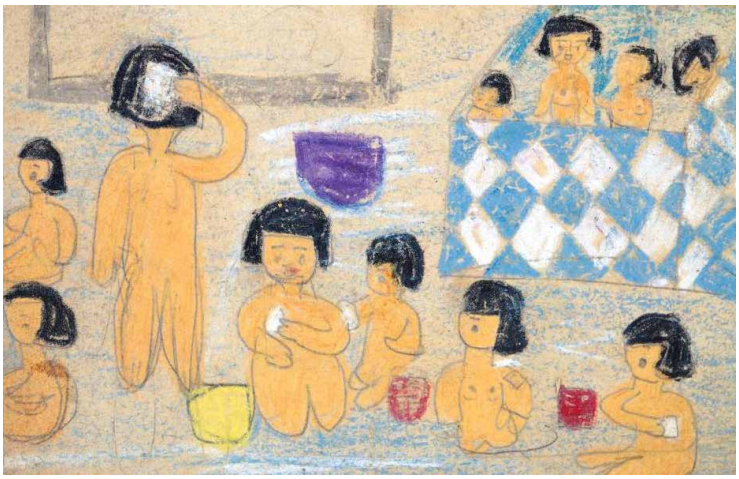
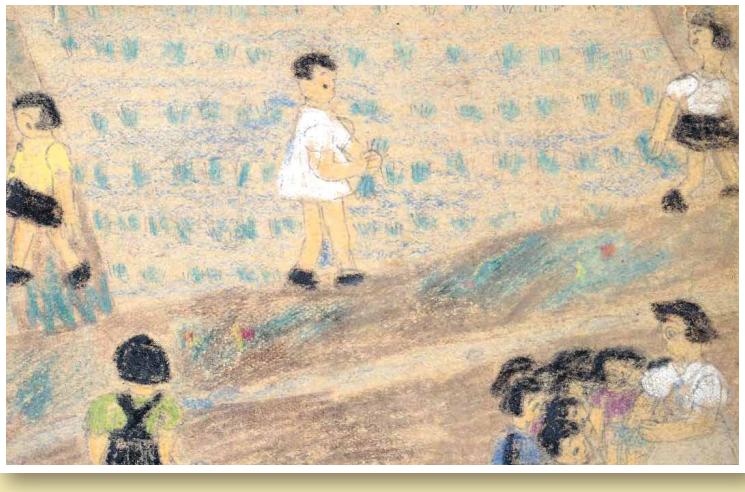
王子区

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
王　子	多野郡神流村	観音寺
	多野郡小野村	泉通寺
	多野郡藤岡町	西蓮寺
	多野郡藤岡町	天竜寺
	多野郡藤原町	成道寺
	多野郡藤岡町	竜源寺
	多野郡美土里村	宗永寺
王子第一	勢多郡東村	祥禅寺
	勢多郡黒保根村	常鑑寺
	勢多郡宮城村	金剛寺
	勢多郡粕川村	竜源寺
	勢多郡粕川村	東寿寺
	勢多郡粕川村	竜光寺
	勢多郡粕川村	先手院
	勢多郡大胡町	長興寺
王子第二	北甘楽郡下仁田町	新杉原館
	北甘楽郡下仁田町	下仁田館
	北甘楽郡下仁田町	常盤館
	北甘楽郡富岡町	美濃久
	北甘楽郡富岡町	源　氏
	北甘楽郡富岡町	万　屋
王子第三	群馬郡伊香保町	森秋館
	群馬郡伊香保町	塚越館
	群馬郡伊香保町	柏　屋
王子第四	群馬郡渋川町	真光寺
	群馬郡渋川町	林徳寺
	群馬郡渋川町	良珊寺
	群馬郡渋川町	正蓮寺
王子第五	群馬郡伊香保町	福　一
	群馬郡伊香保町	香月館
	群馬郡伊香保町	市川旅館
王子赤羽	群馬郡伊香保町	大森館
	群馬郡伊香保町	青山旅館
	群馬郡伊香保町	金田屋
	群馬郡伊香保町	丸本旅館
	群馬郡伊香保町	立花屋
	群馬郡伊香保町	ふじのや
	群馬郡伊香保町	叶　屋
	群馬郡伊香保町	油　屋
	群馬郡伊香保町	福善旅館
豊　川	勢多郡桂萱村	竜沢寺
	勢多郡桂萱村	玉蔵院
	勢多郡南橘村	日輪寺
	勢多郡南橘村	宝林寺
	勢多郡大胡町	長善寺

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
豊　川	勢多郡大胡町	金蔵院
	群馬郡総社村	光厳寺
	群馬郡総社村	元景寺
荒　川	勢多郡黒保根村	梨木旅館
堀　船	勢多郡富士見村	大聖寺
	群馬郡古巻村	竜伝寺
	群馬郡古巻村	神宮寺
	勢多郡北橘村	雙玄寺
	勢多郡横野村	宗玄寺
	勢多郡横野村	興禅寺
	群馬郡豊秋村	光運寺
	北甘楽郡下仁田町	常住寺
柳　田	群馬郡伊香保町	岸　権
	群馬郡伊香保町	石坂旅館
下十条	群馬郡伊香保町	千　明
	群馬郡伊香保町	金太夫
姥ケ橋	群馬郡伊香保町	古久屋
	群馬郡伊香保町	松村旅館
清　水	群馬郡伊香保町	横手館
	群馬郡伊香保町	新井屋
	群馬郡伊香保町	吉田屋
岩　淵	群馬郡榛名町	榛名協会
第二岩淵	北甘楽郡小幡町	宝積寺
	北甘楽郡小幡町	長厳寺
	北甘楽郡小幡町	福厳寺
	北甘楽郡小幡町	興厳寺
	北甘楽郡真屋村	向陽寺
	多野郡吉井町	恩行寺
	多野郡吉井町	法林寺
	多野郡多胡村	仁叟寺
第三岩淵	群馬郡伊香保町	木暮旅館
	群馬郡伊香保町	木村屋
第四岩淵	多野郡平井村	仙蔵寺
	多野郡平井村	高源寺
	多野郡平井村	常光寺
袋	多野郡鬼石町	神水館
	多野郡鬼石町	浦部館
	多野郡鬼石町	八塩館
神　谷	甘楽郡小野村	長学寺
	甘楽郡富岡町	竜光寺
	甘楽郡富岡町	永心寺
	甘楽郡富岡町	金剛院
	甘楽郡富岡町	海源寺
	甘楽郡富岡町	本城寺
	甘楽郡富岡町	福寿寺

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
神　谷	甘楽郡富岡町	栖雲寺
	甘楽郡福島町	伝宗寺
	甘楽郡福島町	慈覚寺
稲　田	群馬郡相馬村	宮昌寺
	群馬郡東郷村	長純寺
	群馬郡箕輪村	法峰寺
	群馬郡箕輪村	竜門寺

滝野川区

国民学校名	疎開先所在地	疎開先
滝　野　川	静岡県沼津市	本能寺
	吾妻郡沢田村	四万館
	吾妻郡沢田村	竹葉館
	吾妻郡坂上村	大運寺
滝野川第一	吾妻郡原町	公会堂
	吾妻郡名久田村	宗学寺
	吾妻郡沢田村	賽陵館
滝野川第二	吾妻郡沢田村	田村旅館
	吾妻郡中之条町	竹廼舎
	吾妻郡中之条町	鍋　屋
滝野川第三	吾妻郡沢田村	鐘寿館
	吾妻郡高山村	雙松寺
滝野川第四	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡沢田村	宗本寺
滝野川第五	吾妻郡沢田村	山口館
	吾妻郡高山村	法信寺
滝野川第六	吾妻郡沢田村	賽陵館
	吾妻郡高山村	泉竜寺
滝野川第七	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡原町	顕徳寺
滝野川第八	吾妻郡沢田村	三木屋
	吾妻郡名久田村	林昌院
滝野川谷端	吾妻郡沢田村	玉泉館
	吾妻郡沢田村	中生館
	吾妻郡沢田村	日向見館
	吾妻郡沢田村	石塚館
	吾妻郡沢田村	三福寺
滝野川田端新町	吾妻郡沢田村	永林寺
	吾妻郡沢田村	丸本旅館
	吾妻郡沢田村	竜鳴館
	吾妻郡沢田村	万　屋
	吾妻郡沢田村	積善館
	吾妻郡沢田村	田村旅館

（昭和 19 年 8 月現在）